関山

かんざん

第24号

寺報　**中尊寺**

目次

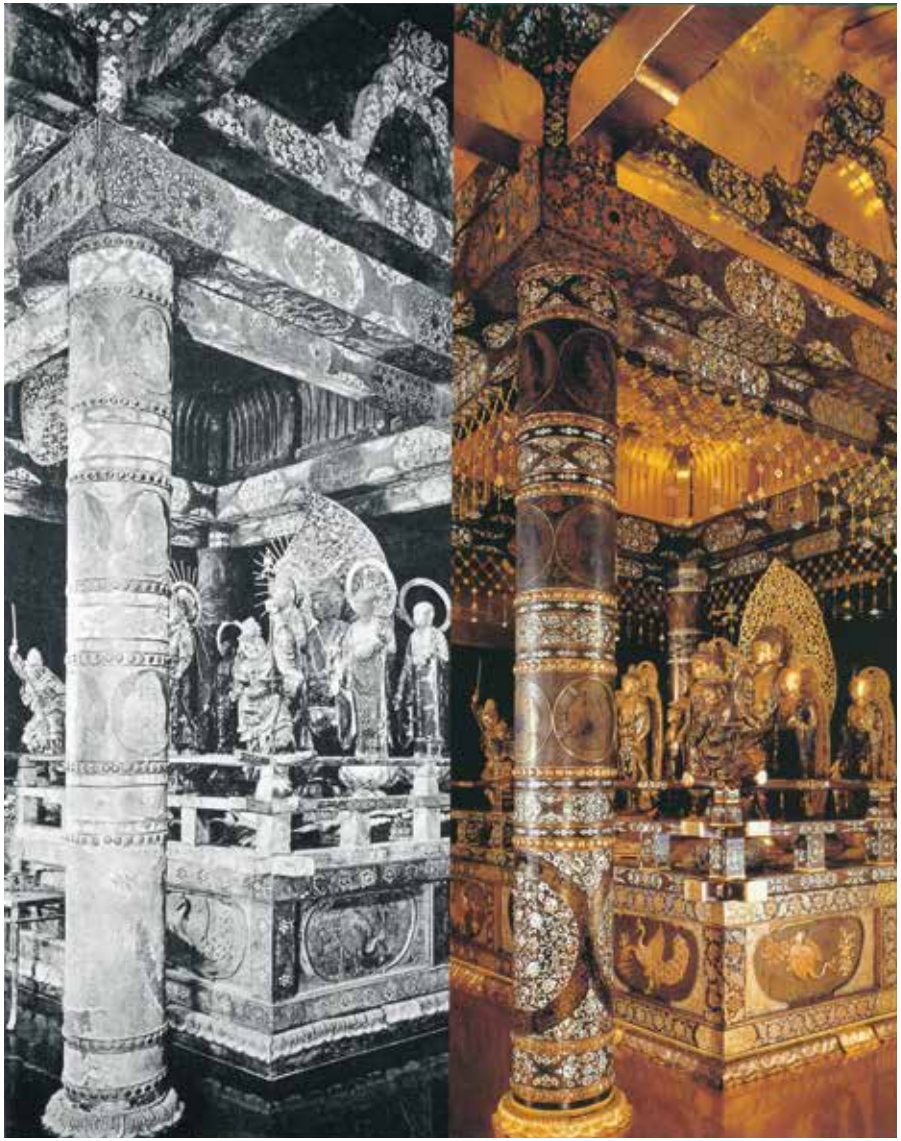
寺報　グラビア
「娑婆訶」　貫首　山田　俊和　書　11
金色堂大修理50年記念シンポジウム
「浄土の荘厳とみちのくの山河」
〔基調講演〕
「桜と月と金色堂」　浅見　和彦　12
〔パネルディスカッション〕
「金色堂の荘厳と寺観」
パネリスト　浅見　和彦・小西　晫也
加島　勝・梅津　章子
コーディネーター　佐々木邦世　26
国宝金色堂大修理五十年を迎えて　菅原　光聴　44
中尊寺の「如意輪講式」復元とその経緯　海老原廣伸　50
第五十七回　平泉芭蕉祭全国俳句大会
特別講演
「古典に学ぶ俳句の韻律」　片山由美子　54
〔好著光風〕
吉丸蓉子著「赤い経巻」とは何か
宮沢賢治と法華経　佐々木邦世　64
磐井清水若水送り　佐藤　育郎　66
普段着の平泉　千葉　敏明　70
ありのままに　南洞　法玲　73
風信／語録
「遠つ淡海」からの便り　佐々木邦世　76
光勝院建設着工　菅野　澄円　78
訪日外国人観光客の受け入れについて　破石　晋照　81
一枚の写真から〈1〉　北嶺　澄照　84
「国宝金色堂大修理の記録」展　開催報告　三浦　章興　85
「かんざん亭」自然の食感　かんざん亭一同　90
関山植物誌〈9〉　破石　晋照　92
〔福聚教会・中尊寺支部便り〕
ご詠歌この一年　三浦みゆき　93
新刊紹介　95
関山句嚢・歌籠　97
御神事能番組　106
陸奥教区宗務所報　108
執務日誌抄　111
御奉納者　御芳名　122
浄財御奉納者　御芳名　122
赤堂稲荷鳥居建立寄進　御芳名　123
不動尊篤信御奉納者　御芳名　123
〈表紙〉『中尊寺金色堂』平山郁夫画伯奉納

国宝中尊寺金色堂全景

金銅経箱〈比叡山横川如法堂埋納〉
（国宝、延暦寺所蔵、写真提供／京都国立博物館、記事26ページ）

金色堂中央壇格狭間孔雀（記事26ページ）

国宝金色堂大修理50年記念



金色堂内陣
昭和37年から43年まで足かけ7年に及ぶ「昭和の大修理」といわれる解体復元修理により、金色堂は創建当時の姿によみがえった。左は修理前、右は修理後。

国宝中尊寺金色堂保存環境調査専門委員会が発足（６月７日）
ガラススクリーンの中に入り、金色堂の現状を間近で確認する調査専門委員の方々。

横手市子ども歌舞伎奉演（10月28日）

金色堂大修理50年慶讃『如意輪講式』法要を厳修（９月30日）
藤原秀衡公の御母が延暦寺の澄憲僧都に託して制作した『如意輪講式』は平成28年に三門の法要が勤修された。今回は850年ぶりに完全復元された全七門からなる法要を、約3時間にわたり僧俗一体となって執り行った。

国宝金色堂大修理50年記念シンポジウム（4月30日）

東日本大震災慰霊法要（３月11日）
陸前高田市小友地蔵尊にて慰霊法要を執り行った。

中尊寺一山子弟得度式
大長寿院の光哉さんが10月13日に得度、天台宗の新発意（しんぼっち）に。

一日頓写経会（６月10日）
法華経八巻に開経と結経を加えた十巻を一日のうちに書写しあげる写経会。

能「秀衡」（11月３日）

紅葉銀河（10月26日～11月11日）
参道の紅葉を照らす紅葉銀河。写真は11日の「経蔵法楽～声明の夕べ『諸天讃』～」。

地元園児による「謡」(11月３日)
平泉二葉きらり園の園児41名、元気よく。

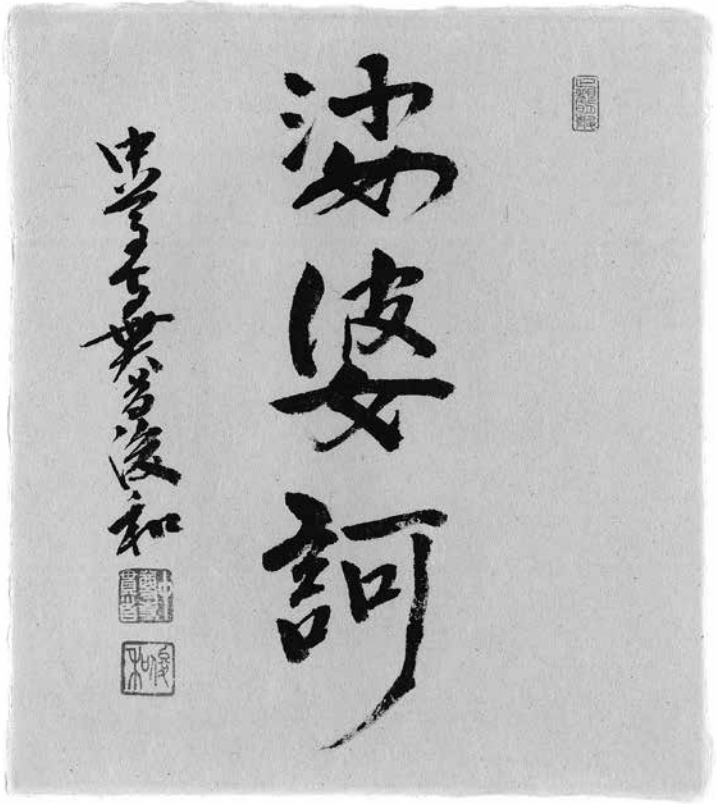
岩谷堂小合唱クラブ奉納合唱（２月24日）

中尊寺寺子屋

境内の自然観察会（７月28日）

槍かんながけ体験会（８月４日）
50年前の金色堂大修理で実際に用いられた「槍かんな」を使用して。

日本の伝統！みんなで作るお茶の会（８月11日）



貫首 揮毫

「娑婆訶（そわか）」真言・陀羅尼の最後につけ、願いの成就を祈る語。

光勝院上棟式（12月10日）

金色堂大修理50年記念シンポジウム　基調講演

「桜と月と金色堂」

講師　浅見和彦先生

浅見　「桜と月と金色堂」ということでお話ししたいと思います。私の後に、シンポジウムで専門の先生方がそれぞれの視座から金色堂のことを詳しくお話下さると思いますので、私からは、この金色堂とか平泉、この東北の地域全体の構図の中でどう考えていったらいいか、というようなことをお話できればと思っております。

今日は四月三十日で、明日からは平成最後の一年が始まるという歴史的な日であるかなと思いますが、今日四月三十日は満月です。私は、なるべく旧暦を使うようにしています。もちろん新暦が便利であること、世界共通であることは重々分かっているわけですが、旧暦には色んな意味合いっていうか便利さがあって、季節感はやっぱり日本の旧暦でやって行かなければいけないというふうに思っております。カレンダーに私は満月にあたる日に、シール貼ったりしています…。まだ大学に勤めている時ですが、論文コンテストみたいなのが学生の間でありまして、その審査員をやってました。参加した学生に何か賞品をあげようということで、その品物えらびが私の役割でした。何か「えっ！」と思うような物は無いだろうかと思ってあちこち探し回ったすえ、一つは旧暦のカレンダーでした。それを見ると、全部…月の満ち欠けが書いてあるんですね。学生さんは貰って喜ぶ人と、「えー？」って思う人と二通りに分かれましたが……。もう一つは、月輪（がちりん）の絵です。かつて日本の古典の時代は月輪観と言って、煩悩に汚れた考え方を月輪の絵を見ることによって修行する、密教の最も基本的な行法とされています。学生さんには一番簡略な、版をお渡ししたんですけどね。これは喜ばれました。今の若い人たちにも、何かそういうものに惹かれるものがあるんですね。

基調講演（中尊寺本堂）

四月三十日、今晩は満月で、ひょっとすると、みちのくこの地域はまだ桜が咲いててるのではと、期待してたら、わずかではありますが残っているようです。と、申しますのは、西行という歌人は桜と満月が大好きでした。桜と満月が今晩味わえるかもしれないこの場所で、お話できるのは大変嬉しく、ご縁があったと思っております。夕暮れを待って、町の方から中尊寺表参道の月見坂を登って来て、杉木立の間からお月見ができると、もうすばらしいの一言です。

歌人西行は、桜の花と満月を一生涯追い求めた人で、

願くは花の下にて春死なんその如月の望（きさらぎ　もち）
月のころ

「山家集」

願うことならば花、桜の下で春死にたいと…。

「如月」は旧暦の二月で、今の三月ぐらいです。望月の頃は十五夜です。西行は七十三歳になった年、文治六年（一一九〇）の二月の十六日に亡くなっています。一日ずれてるんじゃないかっていうふうに思われるかも分かりませんが、この年の二月、満月が正に十六日でした。この西行の死は都人の噂になっておりました。西行クラスの人だと、こういうこともありうると、私は思っています。

一例を挙げますと、将棋の十四世名人・木村義雄という方がいらっしゃったんですが、あの方は亡くなったのは、十一月の十七日、これ「将棋の日」。江戸時代、将軍が将棋の日に定めました。その将棋の日に亡くなって、そして亡くなった年が八十一歳でした。八十一というのは将棋の世界では非常に大事な数で、将棋盤のマス目が九×九ですね、将棋の世界では八十一歳は「盤寿」といいます。そういうことで、この木村義雄十四世名人は将棋の日、しかも盤寿に亡くなったというのが近代の出来事として伝わっております。

西行は満月、二月十六日に命が尽きる、これはあり得ることというふうに私は思っております。西行は桜を追い求めて全国を歩き回っている。それで、「願はくは花の下にて…」の次の歌、「仏には桜の花を奉れわが後の世を人弔はば」と、桜の花を自分の墓前に供えてくれればいい、供養の供花にと。いかに桜に拘っていたか分ります。また、

花の歌ども読みけるに
吉野山去年の枝折の道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん

「聞書集」

と、奈良県の吉野山です。山全体が桜の木です。まだ見ていない桜の花があるかもしれない。見落としのないように、「道かへて」全山の桜木を見尽くしてやろうと、山に入ったわけですが、この桜見たか、そこは行ったか、目印が欲しくなって、西行は枝を折る、「枝折」、栞です（しおりの原義）。枝を折っていない方角を見て行こうとしたのですね。

さて、西行は吉野山だけでは満足しておりません。西行が生まれたのは元永元年（一一一八）、一一一八に九〇〇を足すと二〇一八年、今年です。今年は、西行生誕九百年です。保延六年（一一四〇）、二十三歳のときに出家をします。それから、天養元年（一一四四）、この頃に陸奥へ出かけて来ています。この時、中尊寺にも立ち寄ってるようです。

西行はもう一度、この陸奥に来ておりまして、文治二年（一一八六）、六十九歳のときにこの東北に現われている。この時代の旅は、基本的には徒歩です。もちろん馬を使うこともありますけど、西行はやはり歩いて来た感がありますね。六十九歳、当時の平均寿命はおそらく四十歳ぐらいと言われた時代ですから、今でいうと八十歳か、九十歳というような、お歳頃かも分かりません。にもかかわらず、東海道を歩いて、鎌倉で頼朝と会って一晩語り明かしている。鎌倉では西行は文化人、和歌を詠む人としてもてなされますが、頼朝の目的は——。歌人としてだけでなくて、もう一つ、西行は藤原秀郷公の子孫でした。奥州藤原氏、清衡、基衡、秀衡。その流れ、途中で枝分かれしておりますけど、先祖は藤原秀郷の子孫です。この奥州藤原三代と、言うなれば姻戚関係でもある。西行はもとは武士です。そんなことを、どうも頼朝は色々聴きたかったのかも知れません。西行は和歌のこと、弓馬のこと、頼朝に教えたのではないでしょうか。それで、別れる時、頼朝は西行にお土産を渡します。それは銀で作った猫の置物でした。西行に贈呈したわけですが、『吾妻鏡』には、こう記されています。頼朝と一晩中面談した。帰りがけに頼朝は西行にお土産を渡した。銀の猫の作り物である。それを、西行は貰ったけれども、鶴岡八幡宮の門の所で遊んでいた子供に「やるよ」ってくれてやった、と書いてあるんですよ。まあ、鎌倉から陸奥まで銀の置物持つ

のは重いから、いいやと思ったのかどうかそれは分かりません。

さて、再度の奥州下向について見てみましょう。文治二年十月十二日、真冬です。『山家集』にこうあります。

十月十二日、平泉にまかり着きたりけるに、雪降り嵐激しく、殊の外に荒れたりけり、いつしか衣川見まほしくてまかり向かひて見けり、川の岸に着きて、衣川の城しまはしたる事柄、様変はりて物を見る心地しけり、汀凍りて取り分寂びければ

取り分て心も凍みて冴えぞ渡る衣川見に来たる今日しも

「いつしか」…すぐにということです。すぐに「衣川見まほしくてまかり向かひて見けり」衣川を見に行きたいと。何で衣川かというと、「川の岸に着きて、衣川の城しまはしたる事柄、様変わりて物を見る心地しけり」…川岸から対岸を見た。何を見たか、それは衣川の城が見たかったのです。この西行が見に行った時の衣川は、南側は中央政権側ですね、京都の政権。衣川から北側は、これは安倍氏の支配地でした。その安倍氏と京都政権は衣川を挟んで対峙していたわけです。いつ中央政府軍が衣川を越えて攻めて来るかも知れない、不安というか危機感を持っていたので、頑丈な城をつくってたわけです。なぜ西行が平泉に着いてすぐに暴風雪、寒い中、衣川まで行ったかというと、内地のほうの建物、防御施設とは違った、その安倍氏の城を見たい、というふうなことで足を運んだのでしょう。それは彼が、やはり祖先が藤原秀郷という武士の血を彼は明言はしていないけれど、そういうふうなものを彼はずうっと終生抱えていたのかなというふうな感じがいたします。もう一つは、陸奥の桜を見たいということが西行の気持ちが強かった。

又の年の三月に出羽国に越えて、滝の山と申山寺に侍けるに、桜の常よりも薄紅の色濃き花にて、並み立てりけるを、寺の人々も見興じければ

類ひなき思ひ出羽の桜かな薄紅の花の匂ひは

詞書の、「またの年に」、次の年に、三月の「出羽国に越えて滝の山と申す山寺に侍りけるに」…翌年の三月、出羽国に出かけて行った。そうしたら滝の山という山寺があって、「桜の常よりも　薄紅の色濃き花にて」…一層美しいと。「寺の人々も見興じければ」といったようにあちこち桜を見て回っています。そして、

陸奥国に平泉に対ひて、束稲と申山の侍に、異木は少なきやうに桜の限、花の咲たるを見てよめる

聞もせず束稲山の桜花吉野の外にかゝるべしとは

奥に猶人見ぬ花の散らぬあれや尋を入らん山時鳥

「陸奥国に平泉に対ひて束稲と申す山の侍るに、異木は少なきやうに桜の限」…束稲山は全山桜で、そこで「聞きもせず束稲山の桜花吉野の外にかかるべしとは」と。そこの桜花は、あの奈良の吉野の他にこんな美しい桜の山があるとは都にいた時は聞いたこともなかったし、思ってもいなかったよ、と讃嘆しています。西行はやはり都生活者です。こんな感動的な山が都の外にあったと。これは西行ならではの感性なんだということを強調しておきたいと思います。

都人は一般に、京都以外のものはあまり認めたがりません。良くとも悪くとも、判定評価の外です。都人の東北観、地方観です。西行はそうではない。束稲山はあの吉野並みだと、美しいものは美しいってパッと言ってのける。これは、王朝で、都で生活している貴族たちの感性とは違います。直感的に見ぬいて、それを言葉にしてこういう歌にする。この平泉に来て桜を見て感嘆した。

ではこれで西行は満足したかというと、それがそうでもない。

「奥に猶人見ぬ花の散らぬあれや尋を入らん山時鳥」この奥にさらにまだ人が見ていない桜の花が、散っていない所があるだろう。訪ねて行きたいものだ、山ほととぎすよ。さらに奥に行こうと詠んでいるのです。そして、

陸奥の奥ゆかしくぞ思ほゆる壺の碑外の浜風

「陸奥の」…その奥ゆかしい、「ゆかし」というのは行きたい、見たい、知りたいという希望を表す言葉で、陸奥の奥の奥にも行ってみたい、それはずうっと私の思いなんだと。具体的な地名は「壺の碑外の浜風」。「外の浜風」は外の浜、今で言うと外ヶ浜、青森県の津軽半島の東海岸にある、陸奥湾に面している外ヶ浜です。それから、「壺の碑」ですが、多賀城市にある壺の碑だろうというふうに思われるかと思いますが、実は他に、青森県にもありました。青森市の近郊上北郡に天間林村（現七戸町）という所から壺の碑という石碑が発見されていた。本当に西行がこの外ヶ浜、青森県の壺の碑に行ったかどうか残念ながら確証はありませんが…。

こさ吹かば曇りもぞする道のくの蝦夷には見せじ秋の夜の月

「夫木和歌抄」

というふうな歌があります、西行には所々に意味不明の言葉が多い。この「こさ吹かば」ってこさが分からない…。津軽海峡の霞、霧ではないかとかですね、また、伝説によるとアイヌの人が敵に追われて危ないと息を吐く、そうして敵の目をくらましてしまう。それをこさと言ったとか。和歌にあまり出てこない、ふさわしくないような言葉も西行は躊躇なく使っている。それが歌人西行としての力量、言葉に対する感覚です。

今日は金色堂の話を、この後、本格的な話を先生方からいただくことになるわけですが、私なりにちょっと違う角度から金色堂について述べたいと思います。「平泉と宇治」ということで掲げました。平泉の秀衡の建立した無量光院は宇治の平等院と形状が似ていたらしいです。発掘調査の報告書などを読みますと、宇治の平等院より一回り大きかったかとも言われておりますが、いずれ、大事なのは、宇治の平等院を模した建物がこの平泉にも造られていた、ということです。宇治の平等院から川沿いに上って行って右手に、山の中に入って行くと、ほんとに閑かな閑かな山間の村、その山里の中に「金色院」があった白川郷という所があります。残念ながら今は、伝白川金色院惣門という江戸時代の門が建っているだけですが、その奥に、願主の藤原頼通の女寛子の供養塔といわれる九重石塔があるんです。金色院というその遺跡の発掘はまだほとんどされていないということです。それから、確認してないんですけど、紺紙に金泥でもって書いた法華経も遺ってるという。所蔵されている方がいるそうです。平等院の鳳凰堂があり、金色院があり、それから紺紙の金泥の法華経があるとすると、この平泉と何か相似たような点があります。地図を見ますと、無量光院が川沿いにある。そして、中尊寺の金色堂は山の上ですね。宇治の地図を見ると、平等院も川沿いの低地にあります。金箔で覆われていたかも知れない金色院、平等院から離れて少し山を登った所にその跡と伝える所があったわけです。

無量光院号新御堂事

秀衡建二立之一、……院内荘厳、悉以所レ模二宇治平等院一也。

これは『吾妻鏡』の中に収められた、中尊・毛越寺方から提出された寺塔などの書上です。平泉の無量光院は宇治の平等院の荘厳を模したと書いてあるわけです。

宇治の平等院は永承七年（一〇五二、鳳凰堂は翌年）の造立です。それから宇治の金色院は

康和四年（一一〇二）に完成しております。平泉の金色堂は天治元年（一一二四）に創建されたことが棟木銘でわかります。両者に何かしら関連があったかもしれません。

さて、京都の政権と平泉の政権ということでお話してみたいと思います。都の政権の絶対性、対する（奥州）平泉の政治はどっかで退くようなところがあった。当時の京都の貴族の日記を読んでますと、平泉からいろ〳〵と献納物があったことがわかります。金、馬。それから布、漆です。金色堂で使われたような漆ですね、ああいう物が上納品として京都に平泉から運び込まれてくる。こちらから上納、貢納しているわけです。貴族の日記では清衡のことを「匈奴」と、辺境の蛮族なんだというように言い切ってる。そのくせ貰う物はしっかり貰うんですけどね。そこはまあ京都の強さですよ。都と東北の関係はどうだったのでしょうか。

『古事談』という鎌倉時代の初めに書かれた説話集ですが、巻の二の第二十四話、「忠通揮毫の額、基衡より奪い返すこと」という記事があります。摂政関白藤原忠通、この人は能書家として有名で、ある門額を揮毫したんですが、それが後に奥州の藤原基衡の寺の額であるということを知って、「そんな話は聞いてないぞ」と怒るんです。そして、「額を取り返して来い」と言って、使者を平泉に送り込みました。平泉はせっかく揮毫して貰った書額だし、その見返りとして物品を上納してるんだから、これはちょっと返すわけにはいかないというんで、いろいろ秘計を廻らしましたが、遂に基衡が根負けしてしまう。使者は、たちどころに忠通が書いた額を斧でもって三つに叩き割って都に持ち帰って来た。その評価が、「菊方が高名、此の事に在り」と。「菊方」というのは使者、基衡相手に分捕り返した男ですよ。菊方の大手柄はこのことにあると。都人からすると、この奥州三代というのは、まあ産物はくれるけれども、

その存在を相応に認めてはいなかった。

もう一つ紹介しますと、「俊明、清衡より砂金を受けざること」というまた古事談話です。源俊明という貴族がいて、この人が清衡から砂金が献納された。でも、受け取らなかった。なぜ砂金を貰わなかったのかというと、「清衡はゆくゆくはこの朝廷の領土を横領して、謀反を起こすであろう。その時は京都側から追討軍を送らなければならなくなるであろう相手から砂金は貰えない」、ということなのです。こんなことから都方が遠境の平泉をどう見ていたかということが、こんな話からも推測できると思います。

また、左大臣藤原頼長の日記『台記』には、東北地方の荘園、高鞍荘（宮城県栗原郡）とか、本吉荘（同本吉郡）、大曽禰荘（山形県山形市）、屋代荘（同東置賜郡）、遊佐荘（同庄内）とかに係わって、都の藤原頼長と平泉の基衡との間での年貢交渉の経緯が載っています。例えば高鞍荘は本来十両であったけど都側から五十両とふっかけて来た。平泉側は十両しか払えないと。そして、妥協して二十五両になった。京都にとっては平泉というのは欠かせない存在になっていたはずなんですが、京都人の意識ではあくまでも彼らは仕える者、僻地の人間なんだというふうな意識です。平泉側は、何とか大事にならないようにと事を収めて来ていたというふうなことが言えるかと思います。

本音ではなかなか解け合わなかった都と平泉、両者。そんな中で、ちょっと面白い伝承があります。耳慣れない本ですが、『袖中抄』…袖の中の本と書きまして、平安時代の末（一一八五～七成立）に書かれた本です。顕昭という学者のお坊さんが書いた本です。その一行目に、「顕昭曰く、石文（碑）とは　陸奥の奥に　つもの石文（碑）あり」。「壺の碑」というのがあると。「日本の東の果てと言へり」…日本の最東端であると。そして「（坂上）田村将軍夷を征するの時、弓のはずにて石の面に日本の中央

のよしを書付けたれば石文と言へり」という…。この石の高さは大体四、五丈とか…「その所をばつぼと言ふと」云々。というふうなことが書いてあります。これどういうことなのか。辺境、辺鄙と言われている所にわざわざ、ここが「日本の中央」というふうに書いた。その意味は何なのかということです。もちろん伝承だから田村麻呂が本当に書いたかどうか分かりませんが、ともかく誰が書いたにしろ、東北の青森県のこの一帯が日本の中央にあたるんだと、そういう認識、情報があったこと、これは動かしがたい。この本の筆者の顕昭という人は、都きっての学者ですから根拠の無いことは書きません。非常に資料に厳しい人で、皆から一目置かれるような人でした。その顕昭は、こういうふうに解説してるんです。最後の行に、「私に云う、陸奥の国は東のはてと思へど蝦夷の島は多くて、千島とも言ふは、陸地を言はむに、日本の中央にても侍るにこそ」と。

…千島列島が、ずうっと北まで続いている、と。そうなると、この青森県の壺の碑に「日本の中央」と書いたということは、理にかなっているかもしれないという評価です。なかなか、都人としては大胆な肯定です。ほとんどの人が常識とは思えないことを取り上げています。青森県に十三湖という湖がありますね、シジミ漁で有名です。これはかつて、「とさみなと」と読んでました。室町時代には「とさ」という地名が他にもあって、一番有名なのが青森県の外海に十三湖、それをかつては十三ノ湊と言って、日本海交易、日本海の船便の大事な港だったんです。そこに安東一族がいて、「十三湊日乃本将軍」十三湊の日乃本、日本の将軍と名乗って、海外と貿易していました。地元の人がおっしゃるには、ある大きい壺が出て来て、その壺に「日本大将軍」って書いてあったとおっしゃっていました。残念ながら今、行方不明なんですが、そんなことからしますと、この顕昭という学者のお坊さんが、ここは日本の中央だぞって言っていたことは、地理的にも根拠がある。当

時の情勢を考えると、そんなにはずれてないわけです。都人は絶対そんなこと認めたくないと思うんでしょうけれども、現地、あるいは世界地図を日本地図をもう少し広げれば、この平泉や十三湊の付近が日本の中心と言っても、何ら差し支えないでしょう。

昔、私、ある調査でサハリンに行ったことがありまして、現地の小学校で、授業を見せてもらったことがありました。廊下に地図が貼ってあり、それを見た瞬間えっと思ったのは真中にサハリンが書かれていました。サハリン島が。それで日本の北海道は、わずか下の片隅に書かれてて、あゝ、サハリンの人はこういう地図を見ながら育ってるんだとわかりました。日本人はどうしても真ん中に、日本を中心に考えるわけです。それであれば、東北、この付近が日本中央という、そういう意識、認識がこの地方の人にあったとしても認められていいだろう、というふうに思っています。

そこで、話が中尊寺になります。中尊寺の「中尊」という名前の由来については、これはもう、いろんな説があって、ここが奥羽の中央だからとかですね。清衡が「仏国土」を建設しようとした意図からして、祈りの場所にしたいというふうな清衡の思いもあったからとか、まあいろんな説がある。これはなかなか決めようがないとは思います。ただ、私は「中」という字にこだわりたい。真ん中。関係があるかどうかは分からないけれども、あの顕昭という学僧が、日本の中央というふうに坂上田村麻呂が書いたことをわざわざ書き留めている、あるいは、隣の十三湊にいた安東氏が、日乃本の将軍と名乗っていたというふうなこともあわせ考えると、やはりその中央なんだと、奥州藤原氏もきっとそう思って、それが中尊寺という名前に反映しているというふうに見てもいいんじゃないかと…私は読んでいます。

日本地図というのはね、東京中心とか上方中

心とかいつまでも考えていたのではだめです。もっと幅広い視野でもってやっていったほうがいいのでは、と思います。

昨日、私はこの隣の一関市骨寺遺跡というところに連れてっていただきました。私の方から行きたいと言って、中尊寺の方にお願いをして昨日行ってきました。本当に感動しました。何に感動したかというと、昔のままの田んぼの風景に感動しましたね。骨寺をご存知の方は分かると思いますが、あそこは中世の田んぼの面影を残しているところです。あの畦道のくねり方、曲がり方。それからその田んぼとすぐ側の道、それから山。その山と田んぼの間を細い道が通っている、この風景は日本古来の風景なんです。日本が近代化する以前の日本の風景です。機械が入らなかった段階はあくまでも人力です。人間の力でもって耕したり、水路を開いたり、それから土手をつくったり、耕地をつくったりした。あくまでも人間が出来る範囲で、協力して出来る範囲でつくっていったというのが、前近代の農業のあり方だった。

それが、明治国家が出来てから、もちろん近代、現代になれば、巨大な重機をどんどん導入して、あっという間に田んぼを掘っくり返したり、山を削ったり、川の流れを変えたりして風景が変わってしまったわけです。

整地されている田んぼも良いですよ。真っ直ぐに伸びている、洪水を起こし難いような立派な水路も良いですよ。でも整地されている田んぼとか耕地とか、それから真っ直ぐな水路を見て、そこに懐かしさとか安らぎとか、たぶん思えません。

それに対して、骨寺の昔のままの田んぼの畦道とか、その横の通路とか、そういうのを見ると、何か懐かしい。近・現代になって土木事業でつくられる道とか建物は、全部主体は直線です。マンションとかビルの屋根、それから高速道路とか新幹線、直線は疲れます。オリンピックで、直線道路でマラソンをやったら記録はよくならないでしょう。高速道路も直線だと事故が多い。直線は人間を疲れさせる。わずかながら湾曲、曲がっていると、心が安らぎます。

その原風景が「骨寺村」にあるんです。好いところです。これからも是非あの景観を護っていただきたいと思います。

平泉というのは、いろいろな宝物・歴史的遺産を蔵しているわけです。中尊寺の光堂の美しさに合わせて、周辺の景観とか、そういうものも一体として押し出していただいて、都会には無い、ここはやっぱり人間らしい生活が出来る所だということを、もっともっと発信していただきたい。

（拍手）

プロフィール
あさみ　かずひこ
昭和二十二年生れ。
成蹊大学文学部教授を経て同大学名誉教授。朝日カルチャー、ＮＨＫ文化センター講師。
専門は日本古典文学、地域文化論、環境日本学。
『方丈記』（ちくま学芸文庫）、『発心集』（角川ソフィア文庫・共著）、『日本文学・旅百景』、『東国文学史序説』（岩波書店）、他に『壊れゆく景観―消えゆく日本の名所』、『失われた日本の景観―「まほろばの国」の終焉』、『日本文学気まま旅―その先の小さな名所へ』（三省堂）など。
高尾・浅川の自然を守る会会長。

パネルディスカッション

「金色堂の荘厳と寺観」

司会　ただいまから、パネルディスカッションを始めさせていただきます。パネリストの皆様をご紹介申し上げます。

先ほど基調講演をいただきました浅見和彦先生。

小西晫也先生。小西先生は、皇居宮殿、京都御所、そして国宝・中尊寺金色堂昭和大修理や赤坂迎賓館等の漆塗・蒔絵・金箔等の各工事を担当されました。現在は、うるし博物館館長でいらっしゃいます。

大正大学文学部教授・加島勝先生。加島先生は、仏教工芸史を専攻され、『日中古代仏教工芸史研究』「中尊寺金色堂須弥壇の現状と明治の模写図」等、仏教美術に関する論考が多数ございます。

文化庁文化財調査官・梅津章子先生。建造物の担当で、著書に『歴史的遺産の保存・活用とまちづくり』、『東京の近代建築』等があります。

そしてコーディネーターは、中尊寺仏教文化研究所所長の佐々木邦世です。

それでは、パネルディスカッション「金色堂の荘厳と寺観」ということで、よろしくお願いいたします。

佐々木　講師先生方のそれぞれの立場から、平泉・中尊寺・金色堂にかかわる思いや、所見、調査の際の思い出などをお話いただきたいと思います。事前の意見調整は一切いたしておりません。ですから何をお話しされるか分からないし、あるいはぶつかるところもあるかもしれませんが、これは大事なことでございます。

今から百年前に、ここ中尊寺の本堂で四日間にわたって二十五時間の講演がありました。その時の資料を見ましたら、錚々たる先生方、文学博士・原勝郎先生とか、殊にも辻善之助先生がここで、「平安朝仏教史上に於ける中尊寺の地位」という題で講義された。あとで大きな論文になるそのお話をされたんですね。この先生方のお話、五日間、二十五時間、十名の先生方がここでなさっています。しかし、その時にそういう先生の識見、お話に対しても「えっ、そうかな」と思う方がいたんです。そして疑問点を、先生に提示して、先生はそれを受け止めて下さって、自分の学説を三年後に訂正されております。そういう大事な経験もしたこの場です。

戦後はまた、奈良博の先生方や、平泉に疎開されていた歴史家の津田左右吉先生はじめ、いろいろな方がここで滔々と自説を語られました。そういう場です。皆さんもどうぞ、それぞれの思いで聴いていただいていいんじゃないかと思います。五十年前の金色堂大修理に直接関わられた、もうほとんどいらっしゃらない当事者。その中で小西先生、当時の思い出を含めて、お話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

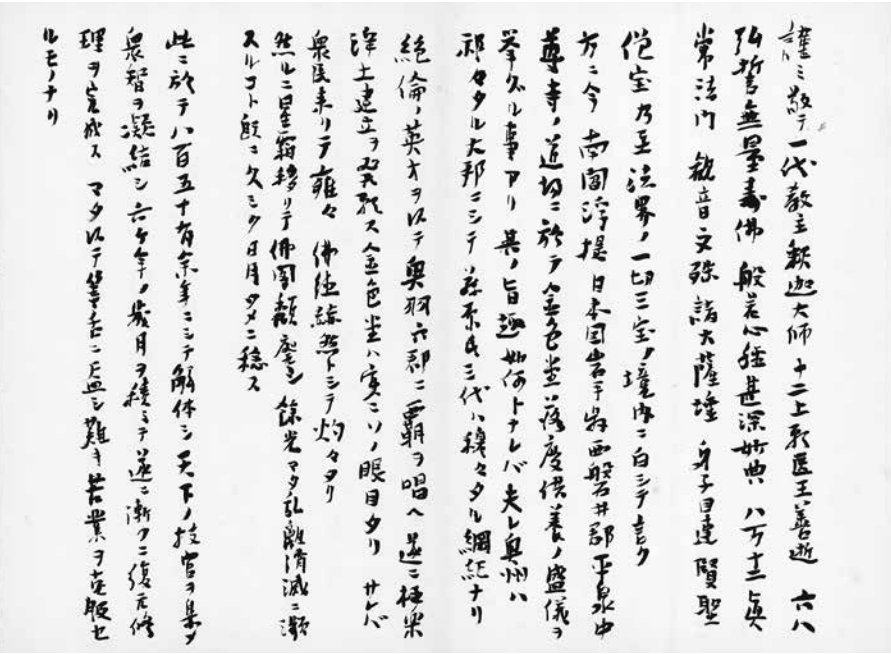
小西　金色堂大修理が竣工して五十年。本日、中尊寺さんの御本堂で、このような席にお招きいただきまして感慨無量でございます。と申しますのは、私がまだ東京藝大の学生時代、漆を勉強しておりました昭和三十二年か三十三年頃、金色堂を初めて拝観させていただきまして、その時金

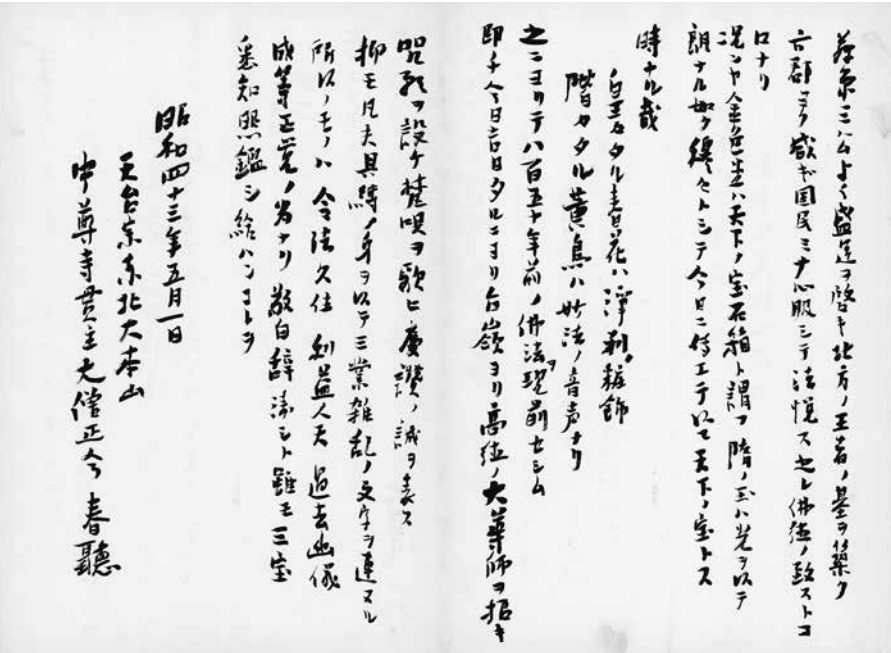
色堂は（旧）覆堂が上から被さって来て、いかにももう窮屈そうに建っているという…。しかも我々学生…仲間三人で来たんですが、金色堂に昇堂、拝観している時に、どなたも入って来ない状況でした。先ほども貫首様とお話ししておりましたが、拝観者、観光客がいかに少なかったかと。終日あたかも我々が貸し切りで金色堂を拝観させて頂いた思い出があります。しかも、直接巻柱、須弥壇などの螺鈿（らでん）や金具、蒔絵にも触ろうと思えばいくらでも触れるという、幸いにもそういう時代に拝観できました。

そういうことがございまして、昭和三十九年に金色堂の漆芸工事が着工され、八月末から内陣の工事にかかったのですが、それから三年八ヵ月の短期間で金色堂の漆塗、蒔絵、螺鈿そして錺（かざり）金具等の修理が完成します。昭和四十三年の五月一日には落慶法要が行われましたが、今改めて金色堂の工事を振り返ってみますと、よく、三年八ヵ月であれだけの工事ができたものだと。修理前の金色堂の全体の写真、この特に東側、東北側から撮られた写真を見ますと、本当に、よくこういう状態だった金色堂を今のような姿によみがえさせることができたものだと。実に感慨深いものがあります。ここに、『日本の美術』（№４５１「漆工品の修理」至文堂）という本がありますが、表紙に国宝の鞍が出ております。これは永青文庫にあります鎌倉時代の螺鈿、黒漆塗りの鞍ですね。この『日本の美術』を編集されたのは文化庁の、当時文化財鑑査官だった鈴木規夫先生です。これは漆工品の修理というテーマで編集されたものなんですが、表紙裏の「中尊寺金色堂内陣（国宝、平安時代）岩手中尊寺」（グラビア１ページ参照）、金色堂の修理前と、修理後の写真を真ん中で割って見せています。これについて鈴木先生から私に解説を書くようにご指示があって書いたものです。それをちょっと読ませていただきます。

金色堂内陣の修理前、修理後の写真を比較すると、改めてその違いに驚かされる。金色堂の解体後三年余の短期間で、よくこれだけ中身の濃い難しい仕事が、いい形でまとめられたものである。当時は、戦後十八、九年しか経っていなかったこともあって、明治、大正生まれのいい工人達を大勢集められたことが建立当初［天治元年（一一二四）］の金色堂に限りなく近づけることができたのであろう。

『金色堂落慶供養願文』





昭和四十三年五月一日　中尊寺貫主 今春聽　筆

と…。

あの時代に、金色堂の修復をしてなければ、それ以降は、おそらく不可能と言ってもいい、それぐらい難しい仕事ではなかったかと思います。私が敬愛している漆芸家の方々も大勢参加されましたけれども、何と言っても修理委員の松田権六先生です。私の芸大の恩師なんですが、その松田権六先生が日本工芸会という会の最高幹部のお一人で、お弟子さん達がその会にかなりいらして、先生の号令一下、「金色堂をやれ」ということで、内陣の仕事はほとんど日本工芸会の方達が参加して、まとめてくれたものです。もちろんそうでない工人の方もいらしたんですが、内陣の難しい所はそういう方々でまとめていただきました。で、外陣と外部の、これが金色堂の金色たる所以の金箔ですね、これは非常に難しい仕事でしたけれども、何が難しいかと言いますと、一つには平安時代の古い漆塗を生かしながら、金箔をそこに押して金色堂をよみがえらせるという…。これは私の父のお弟子さん達で、日光東照宮の…、平安時代と江戸時代じゃ時代が違いますけれども、日光東照宮の仕事で長年、金箔と漆塗りをやって来た名人達が、非常にいい仕事をしてまとめてくれたことが大変大きな結果を生んだこと、そう言えると思います。

佐々木　その内陣について、修理が成った金色堂を、ずいぶん時間をかけてきちんと研究された加島先生、お願いします。

加島　今日のテーマが「金色堂の荘厳と寺観」ということで、特に金色堂堂内の荘厳について用意したスライドを用いてお話をさせていただきます。金色堂は堂内外がほとんど金箔で覆い尽くされて、それが「金色堂」という名称の由来になっているわけです。須弥壇や巻柱、そうした所に様々な金具やそれから螺鈿、そういった飾りで荘厳されていることはよくご存知だと思います。特に、金色堂の須弥壇ですけれども、格狭間（こうざま）というお椀を横から見たような形の中に、孔雀とそれから浄土に咲いているといわれる宝相華の花が表されています。孔雀は経典に数えきれないほど出て来るんですけれども、宝相華の方はもしかすると全くと言っていいほど経典に出て来ないのではないかと思われ

ているのですが…。今日は、その宝相華についてお話したいと思います。今ご覧いただくのは、この中央壇のこの格狭間の外側にあるこの花の形がいつ日本で成立したかというと、これは上東門院彰子（藤原道長の娘）が法華経を書写し埋納したという比叡山横川（よかわ）如法堂の金銅経箱です。長元四年（一〇三一）に埋納されたという宝相華文の経箱なんですけれども、それを見ますと…これですね、花芯がちょっと違いますけど、雄蕊（おしべ）になっていますけど、前に一枚、左右に二枚、斜め後ろに二枚、真後ろに一枚、同じ構成になっております。これはおそらく日本で完成した花の形なんです。で、その前はどうだったかというと、これは京都仁和寺蔵の宝相華蒔絵宝珠箱（国宝）です。六弁なのですが、形が穏やかですよね。葉っぱの出方が何となく楕円形の中に入っている。これが葉っぱが突出するようになって先ほどの彰子の経箱になる。これは平等院の組み物なんですけど、永承七年（一〇五二）彰子の経箱の二十一年後ですね。これを復元模写すると、前に一枚、左右に二枚、斜め後ろに二枚、真後ろに一枚で、三つ葉形の花芯。これが中尊寺の金色堂の、先ほどお見せした宝相華と同じなわけです。こうした斜め上から見た形の花が、実は金色堂のそこかしこに咲いているということなんですね。それを少し見ていただきたいと思うんですけれども、金色堂の螺鈿であったり、金具であったり、そうした所に表されています。八双金具は左右両脇壇にもありまして、向かって右が西北壇。向って左が西南壇ですね。中央壇のと比べると少し硬い感じがしますよね。花びらがこう硬くなっている。両方とも硬くなっていて、花弁の数も違うんですけれども、それでも西北壇のほうが少し柔らかい感じがします。この差というのは、じつは両脇壇の作られた時代、年代が違うということを示しているということになります。

それから、西北壇は螺鈿の残りが大変悪くて、傷みが進んでおり、それに対して西南壇のほうは、かなり螺鈿がよく残っています。

迦陵頻伽（かりょうびんが）文の華鬘ですけれども…、まさしく典型的な宝相華文だと言えます。このように考えると、中尊寺金色堂は、言葉としての宝相華文のことは別にして、この形の花が中尊寺の金色堂の主体の成している。つまりこの「宝相華」が浄土に咲いている花を表しているんだということ、

そう言ってもいいのではないか。申し上げたかったことは…（先ほどの浅見先生とは逆に）何一つ文字を使わずにお話をしましたけれども、よく見ると、実は色んな情報を与えてくれる、よく見る人にはいろんなことを教えてくれる。だけど見ないで、通り過ぎてしまうと何も教えてくれない。ちょっと立ちどまって、その物を見るということが実は楽しいんだということを今日は少しご理解いただければと思いお話した次第です。

佐々木　ありがとうございました。それでは文化庁文化財の調査の立場から梅津さんにお話をお願い致します。

梅津　わたくしは今、文化庁文化財調査官ということで、いつもは大体裏方で文化財指定したりとか、あとは修理をする時にいつの時点で復元していったらいいかとか、その文化財をちゃんと管理できるようにいろいろな設備をサポートしたりとか、そんなことをやってます。通常裏方で、なかなかこういう晴れ晴れしい舞台に出て来ることがなく、緊張しています。先ほど佐々木先生から言われたように、今日何の打ち合わせも無くお伺いしまして――。なぜ呼ばれたんだろうと思ったら、最初に貫首さんのご挨拶にもありましたように、金色堂の修理も五十年を経て、建築としてやはりいろんな所に亀裂やら破損の心配も出て来ているので、今後の修理を考える上での最初のスターターということですね。

文化財の修理では、事業が始まりますと、かつての修理どうやってやったかを見直すことが多いわけです。建ってから今に至るまで、どんな変遷を経て今の金色堂がこのような状態になっているか、そういう話をさせていただこうかと思います。

金色堂が建立された年代、皆さんご承知のように、天治元年（一一二四）ですね。国宝第一号ってよく言うんですけども、実は、昔の法律で重要文化財になってたものを国宝にした時に、その一番北にあったので国宝第一号と、よく言われています。重要文化財又は国宝として、文化財保護法によって護られている。大切なのは一緒なんですけども、国宝と重要文化財と何が違うか。よく法律を見ると、国宝とは重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもの、そう

書いてあるんですね。歴史上も極めて優秀で、文化史的に意義の特に高いものです。重要文化財は、これは所有者の責任において管理していく、となってるんです。中尊寺がこの金色堂を維持していて、国がサポートする。だから財政的なサポートももちろんそうですし、修理においてはその価値を損なわないように支援していく、というのが私どもの仕事です。もう一つですね、国宝については、もし、所有者が管理できないとかそういうことになったら、国自らが修理できる、滅失毀損の対策を取ることができる、と書いてあるんです。何を言いたいかというと、国は何が何でも護るというのが国宝なんだというふうに私は理解しています。重文も国宝もいずれも大事なんですけれども、やはり、国宝の修理は非常に身が引き締まる思いです。

今日はその金色堂と覆堂ですね。これ、今離れ離れになってますが、ご存知のように昭和の修理の時までは、一緒の、セットになっていたわけです。中尊寺一山の中には、建造物には石塔などもあり、ことに美術品は数え切れないほど、価値の高いものがたくさんあります。なぜ、これほどまでによく残されているかということですけども、木造の建築、例えば茅葺きの場合、毎年雪によってちょっと茅が落ちたら差し替えしたりとか、三十年、四十年、五十年で全体葺き替えたりします。それから、何百年に一回ぐらいの頻度で…、建物の性格とか立地によって違うんですけど、多くが三百年、四百年、五百年ぐらいで一回大きな修理が入ります。

金色堂は、もう九百年近く経ってますから二回、三回やってもおかしくないんですが、じつは大きな修理は、五十年前の修理だけです。この修理は非常に大きい意味があります。それまで、なぜそれが残されてきたか。時代時代に修理をやってきたということと、金色堂だけでなく覆い屋の屋根の葺き替えが行われ適切に管理されてきています。近世において記録にあるものだけでも六回あります。それから、金色堂が建ってすぐに、何らかのカバーするような覆い屋ができていたということも、痕跡調査等からわかっています。これは、それ以外にもおそらく細かい修理を適宜やっていたんだろうというふうに思います。

明治に入ると新しい考え方で文化財を護る修理が行われました。そして、現代の文化財修理はあまり斬新なことを

せずに過去において保存されて来た状態を維持する、乃至はその建物が一番いい状態に戻してやる。修理が大きく三つの流れにあるのかなと思っております。金色堂がかなり傷んでいたと言いましたけども、復元できるだけの歴史を残してくれたというのは非常に大きいです。かつては、おそらく覆堂は仮設的に建ててた時期もあったと思いますが、五十年前の修理の時に金色堂を護るために新しい覆い屋を建てた。解体しまして、建物の状態がよく分かったので移築して復元できたということです。

旧覆堂の現状は、床は土間になっていますけど、これは元禄の時の大きな修理の時、覆い屋と堂とが一体になっていて、縁板を敷き替え「縁より下と外側とも仕切り直し候」などと記していて、十七世紀、十八世紀になったらもうほとんど縁と一体になっていたんだろうということが分かります。中世、近世の建造物の修理というのは、通常は、日常的な修理で、利用の仕方とか傷み方とかで、今ある状態を維持して行く、追加して行くような修理ですね。文化財として守るというよりも建物としての機能を維持して行くということになると思います。

明治の修理では、ずいぶん傷んで来たので、その時の最新の技術と最新の考え方で補強しようとしたんですね。で、鉄材を使って近代的な補強方法を取りいれました。残念ながらこれは後で、やはり適当ではないということで、撤去することになります。文化財の修理って、その時ベストと思っても、やはり見直してみると、取り返しのつかないこともあるんじゃないかなと思ってすごく慎重になります。国宝については、文化庁全体として間違えの無いような修理をして行かなきゃいけないと考えております。明治の修理では鉄パイプを入れたりとか、建具の上のほうに鉄の帯を入れたりとかですね、補強しています。それから仏壇の部分も改造して棺を納めるだけに変えてしまったりしています。これが、金色堂の価値をちょっと変えてしまったというのがあって、昭和六年の時に復旧しています。それから床周りも一新しましたし、天井も無かったものも復旧しました。

ただし、ここで一つ言えるのは、中の漆芸については、ほとんど変えることなく補修が終わっています。非常に慎重になってしまったんではないかというふうに思います。

建造物は大きく改修して、修理して行くのが通常ですが、美術品はやはりその価値を維持していくのが第一に考えます。漆芸については剥落するのを止める程度に抑えています。工芸的な復元は見送ろうというのが明治における考え方でした。これは、中尊寺に限ったことではなくて、将来的に何か問題があった時に除けれるようにですね。原材を全部変えるんじゃなくて、付加的に、最低限のダメージということで補強しています。新薬師寺も同じです。（スライド説明略）

昭和六年、覆堂を解体しています。縁が無くなって一体だった、屋根がずいぶん傷んでおりました。木瓦、木の瓦です。これを解体して、少し建築的な修理をして、もう一度覆堂を戻しています。この時、明治の修理の際の補強がやはり良くなかったので、鉄材を撤去しました。床下もコンクリートにして少し湿度をコントロールしました。ちょっと面白いのは免震的構造に束組を変えたと書いてあるんですが、枠にして建物の建築的基礎を無くし、お神輿みたいな感じになっています。ただし、この時も漆塗りは部分的な繕いに留めていて、やはり慎重にしていたのがよく分かります。

昭和三十七年から四十三年にかけての修理の概要です。漆芸に関しては小西さんから三年半ぐらいでやりましたとお話ありました。そのかなり以前から、中尊寺さんからの要望がありまして、どうしたらいいか、その前の調査に入っております。解体して修理するというのは建築物ではよくやるんですが、ここ金色堂について見ますと、まさに英断したんだと思うんですね。今見てもやはり私ども、もし同じ立場にいたら、判断に迷います。金色堂内部も解体して東京に搬出して修復をした。その時にできる、ベストの体制をつくって復元したのがこの昭和四十三年、五十年前の修理の位置づけだったと思います。発掘調査をして、母屋がどうだったかというのも調査しました。宝珠の部分が無くなっていたり、須弥壇の失われた金具なども復元しました。

今回の場合、もしかしたら地震とかが影響したんだろうと。建物として漆の部分をどう修理するか、五十年後にどう影響するのかということも含めて美術品的な修理をやって行かなきゃいけない。建物を漆で塗る、金箔を貼るとい

うことは、通常の美術品の修理以上に、想定できないことがおそらくあるでしょうと。漆は植物ですし、こう収縮したりとか…。今日、小西さんが来ていただいてますけども、そういった専門家の方、五十年前の修理の考え方、そういった蓄積をもって次の修理に検討して行きたいというふうに思っております。

佐々木　ありがとうございました。国宝・金色堂の解体大修理は、昭和三十七年から着手されたわけですけれども、中尊寺の方からは三十三年、三十四年のあたりから金色堂がどれだけ危険な状態に陥っているかを説明し、実見対処方を文部省の方にお願いしておりました。ようやく三十六年のあたりから報道関係も動いてくれまして、「荒れる中尊寺金色堂」「解体修理是非必要」というふうなことが報道されるようになって、それから衆議院議員の文教委員会、浜野清吾さんや山中吾郎先生や皆さんがいらして、あの金色堂の屋根に実際登って、解体修理へ向けて結論を出していただきました。

そこで大事なことは、地域の人、地元の人の、関わって来た現場にいた人達の話を聞いてほしかったということです。明治三十年の修理時には、口をきくことは相成らんという形で岡倉覚三（岡倉天心）が中尊寺に来まして、現場で工事をしている人にあれこれ物を言わないこと、言うことがあれば県を通して東京に持って来るように、というような掟を設けて、そして、修理担当者の思い込みで須弥壇を切り詰めたりしたんですね。後で、寺から国に訴えて、やり直しをお願いした。昭和五年の修理の際には、今度は揺れては駄目だ、基礎が大事だというんで、床下のコンクリートを乗せたら、もろに湿気が上がるわけですよ。それを分かってくれなかった。昭和三十七年からの保存解体大修理で、今度は科学的に空調施設をということになった。専門家が言っているからというので、現場にいた一般の人達は声を抑えられました。あんなふうにしたら、ここは山の上ですから湿気がうんと多い。「六月、七月にはお堂の中見えねがすと」って、言われてるんですよ。「何言ってるの、空調だから調節できるよ」の一言です。

ガラススクリーンの中は調節できるかもしれないけど

も、私が昭和四十九年に寺に帰って来た時は、六月・七月には拝観のお客さんから「金色堂見えません」との苦言をいただいて、ガラス拭きばっかりやってました。金色堂の軒先ギリギリの所にガラススクリーンがありましたから、屋根の上と床下とでは温度も湿度も違うんですね。それで、寺の先輩北嶺澄仁氏が、全体の温度湿度を毎日録ろうと、録ってデータを出した。それで漸くまた動いていただいた。でも、これが空調だと。だから除湿機をオンにすればいいと。そうやってたら、もうこれ以上やるなと。空調するならガラススクリーンよりも外でやってくれと、そのような状態でした。

私が思うには、絶対ということはない。これで全て解決ということはないのですから、国の文化財担当官も、もっと皆の話を聞くべきだろうと思うし、また、地元の人達も文部官僚にお任せじゃなくて、思うところあるなら発言していただきたい、そう思っております。

それから先ほど、松田権六先生のお話ありまして、金色堂内陣がどれだけ傷んでいたか、具体的にこう書いているんですね。

巻柱の損傷はことのほかひどいものがある。畳針を柱の中心に向かって表面から刺し込むと、ズブリと簡単に入ってしまうくらいである。またスチール製の巻き尺を柱の中心部に縦に軽く押してみたら、ほとんど抵抗感もなしに中へ巻き尺がするすると入ってしまった。こんな状態でよくお堂が建っていたものと不思議にさえ思われた。

そういう状態でありました。なお、一つだけ申し上げます。金色堂は、金箔を貼ってるから金色堂ではございません。阿弥陀仏は無量光仏（アミターバ）。無量の光だから、光ってても光らなくても阿弥陀堂は光堂なわけです。それを、実際に金箔で荘厳されたのが金色堂ということでございます。そこのところ、逆にならないようにお願いしたいと思います。

さて、浅見先生からその環境の中で、この金色堂をとらえる時に何かお気づきのことございましたら…。というのは、先生が大学で学生と一緒に遠足するんだそうですね。一緒に歩いて、先ほど言われるように、立ち止まって見えるものがある、と。それを学生に一緒になって、そういう

中で見えてくるものがあるんだそうですが、月見坂を歩いてそれで金色堂、あるいは骨寺村を歩いて経蔵の紺紙金銀字経、こういったものを何か、環境の方からお話いただきたいと思います。

浅見　結局、金色堂の中は、湿気の問題がどうしても付きまとうんだと思うんですね。それで、湿気をどう防ぐかということは、もう日本という国土が常に抱えて、取扱いに苦慮している問題だと思うんですが、逆に、その湿気というものをどう評価するかという問題もあるかな、と。

たとえば、昨今は建具ではあまり見られなくなりましたが、雪見障子ってありましたよね、こう上げ下げして、それで外が見える……。外国人にあれを見せると本当に驚嘆するんですよね。何だ、どっかで止まってんの、そうじゃない、ただこうやってんの…。そういうふうな細かい、外国人を驚かせるような技術が出て来るのも湿気なんだと。それから、日本でお茶なんかを買って来ると、必ず密閉される茶筒に入れますよね。で、外国は紅茶なんかを私よく買って来るんですが、あちらの紅茶の入ってる缶というのはネジも蓋もずぶずぶなんですよね。もちろんきっちりしてるのもあるんですけど。その湿気というものを何かこう生かす形で、排除するのではなくて、生かす形で金色堂をはじめとして様々な工芸品とか美術品を甦らせて、保存維持して行くような、そういう方法というのはないものですかね。

佐々木　全く驚くような、逆な発想の中から得るものが得られればいい、とは思います。そういえば京都の大文字山、あのあたりは楢枯れがすごいんだそうですね。あっという間に二万本ですか、それの数字が書かれたのが、もう八年も前なんですね。今どうなっているのでしょうか。宮城・岩手、こちらの方もだんだんイノシシは来るし、次に楢枯れが来たらどうなるんだろうと心配もあります。それから、五十年前、世紀の大修理、甦る金色堂というふうに言われたわけで、昭和六十一年に、もう一度保存施設調査委員会を立ち上げていただきました。「保存科学」という学問分野を創設した関野克先生を委員長に、建築環境学の視点から、特に名古屋工業大学の宮野秋彦先生、生物学・文化財

虫害研究所長の森八郎先生、そして調査委員として東京国立文化財研究所から漆や光やらの専門の方々が参加していただいて、そういう先生方にも入っていただいて、鈴木嘉吉先生がまとめ役になっていただきました。それで、驚くことに三年間ですか、十四回の会議をやってらっしゃる。普通考えられないでしょう、本気になったなと思っております。そのような形で今後とも金色堂、国宝のことを一つ一つお願いしたいと思っています。

皆さん、明治九年に明治天皇が東北御巡幸、この時に金色堂の中にお入りになって、それでお付の木戸孝允がですね、「天下の規模とも相成り候ゆえ、永世かたく保護いたすべし」と。岩倉具視が、側から「最も火の元を注意せよ」とおっしゃった。寺のその日の日記にこう書いてあります。「実に綸言（りんげん）（天皇陛下自らのお言葉）、同様の御こと、畏れ多き次第なり」。これから、この寺宝を国家の国宝として、大事にするという一層認識がされて来たわけです。しかも改めてそこに目がいったのが、『中尊寺国宝保存後援会趣意書』です。これ昭和二十三年、戦争が終わったばかりです。平泉に来られた総司令部、ＧＨＱのジェームズ・プルアー教授が「国に、県に頼むのも大事だけれども、それよりもその地方の民間一人一人が、そして皆が協力して護る。そういう保存後援会をつくることが大事だ」と、中尊寺にアドバイスしてくださった。それが、この山が観光客が一人も来なくても、やらなきゃいけないんだという認識を持った起点だったと思っております。

小西　もし、この昭和三十九年から四十三年までに金色堂の修理工事をしていなければ、おそらくこの三年八ヵ月で、あれだけの仕事ができたということは、あの時期を逃したらできなかったのではないかなと思っております。と申しますのも、たとえば、金色堂に使われている螺鈿の夜光貝ですけどね、金色堂の工事で我々が使った夜光貝というのは、大きさが直径が二〇センチぐらいありまして、重量が一・六キロから一・八キロぐらいあって大変大きなものだったんです。そのぐらい大きな夜光貝でないと宝相華の花の一番大きな華の文様が取れない。そのような、金色堂の工事で使った原材料が今は徐々に採取量が減って来ている。と同時に、金色堂の工事の時にはそれら巻貝の夜光貝を切

り、板状に摺って使いましたが、そういう摺り貝を作る業者が減って来ました。これは、大阪南の、泉南に昭和四十年頃は十五、六軒、そういう貝を加工する所がございまして、金色堂に使った夜光貝は大阪府の奥野貝細工製作所という所でしたが、昨年調べましたら、もう二軒しか残っていない状況でした。で、東北歴史博物館に金色堂の内陣の一部を復元する仕事を平成十一年頃させていただいたんですけれども、この時にはまだ摺り貝を作る業者の方がいらしたんですが、もう今は夜光貝の摺り貝を作る業者が激減してしまいました。

それから、金色堂の金箔を作る職人さんも…、ご存知かも知れませんがチャイナから安い金箔がたくさん入って来て、そうすると日本…、ほとんど金沢が中心になって金箔を作っておりますけれども、安い金箔が入って来るので、だんだん国内の金箔職人さんの仕事が減ってしまった時期もありました。金色堂修理の時に作りました金箔、これは特別な金箔でして、普通、金箔というのは打った後、真四角に、三六（さぶろく）、と俗に言っている三寸六分、一〇センチ九ミリ角で、他は四二（よんにい）と言って四寸二分、一二センチ七ミリの箔に切ります。金色堂で使った箔は打ったままの状態で、四方を切らずに、そして、一般の金箔より厚みのある金箔を金色堂では打って、使って、なおかつその端の部分は重なって二重になっているんですね。これはもうどこにもない、平安時代の黒漆の上に厚みのある金箔を重ねて貼ると重厚な表情になる金色堂にしかない非常に貴重な金箔と金箔押しなんです。そういう金箔を作る職人さんの方もだんだん高齢化して来まして、金色堂の金箔を打った工房を三年ほど前に訪ねて聞きましたら、上手い金箔を作る職人さんが減って来ている。ですから、色々な意味で明治・大正時代生まれのいい工人さんの減少、また沖縄から夜光貝を五百個いっぺんに買えた時代は終わって、今は、大きくて立派な夜光貝は一度に買うことができない時代になりました。それから金箔の方も、七、八回ぐらい作り直してやっと金色堂に使える箔ができるという状態でした。それから初代の清衡公の木棺、これは黒漆を塗って金箔を押してありますが、ここにもそういう金箔が見られます…。で、私はその切らずに使っている金箔に「古代箔」という名称をつけさせていただいたんですけれども、いろいろな意味で

は非常に良い時代に金色堂の仕事ができたというふうに思っております。

佐々木　漆芸家松田権六（人間国宝）先生のもとでお仕事をされていた大場松魚（人間国宝）さんですね、この方が金色堂でいろんなものを得た、気が付いたものも多かった、と。そしてそれらを「全て金色堂に置いて来ました」とお話された。お会いした時にそう聞かされたことを覚えております。大変印象的だったものですから――。

参加者　宝相華って、植物としては何の花なんだろうかなと思いながら聞いていたら、最後に、あれは浄土に咲いている花で、この世のものではないようなことを言われました。そういうことかなと思いましたけど、見てみるとムクゲの花に似ているんですよね。東北にはムクゲの花がいっぱいありますし、朝鮮の、韓国の国の花がムクゲですから、考えられるのかなと思いましたけれども、宝相華の花は何の花をイメージされたのでしょうか。

佐々木　ではその宝相華から…、名前がいつ頃から言われたかも含めて、加島先生、お願いします。

加島　具体的な花…、今まで色んな先生がこれではないかとおっしゃってるんですけど、どうもピタッとした答えが見つからないということがあって、逆に、だから浄土に咲いているお花なんだということが定着して行ったんだろうと思うんですね。まあ今、ムクゲの花という…、私はそれと似ているかどうか全く今まで気にしたことがなかったんで…。まあ、中国大陸から来たか朝鮮半島を経て来たか…。ですからそういう道筋、国をたどることによって、逆に具体的な花のことが分かるかもしれませんね。今後よく考えてみたいと思います。

小西　宝相華のご質問がございましたけれども、金色堂修理委員会の委員をされていた松田権六先生が、金色堂の宝相華の由来についてちょっと書かれたものがございまして、それを読ませていただきます。

宝相華は、蕾と花と実と葉の四つが同時に見られる霊

樹で、霊草だから古来仏教では蕾は未来を意味し、花は現在で、実は過去を意味するとされ、葉は常時これらに栄養を与え、永久に生々流転する生命力の消息で、永劫の過去から永劫の未来につらなる意味で、宝相華は吉兆の最たる所以とされ、仏の天蓋を始め、光背、仏具、天衣衣文など広く宝相華文が用いられている。

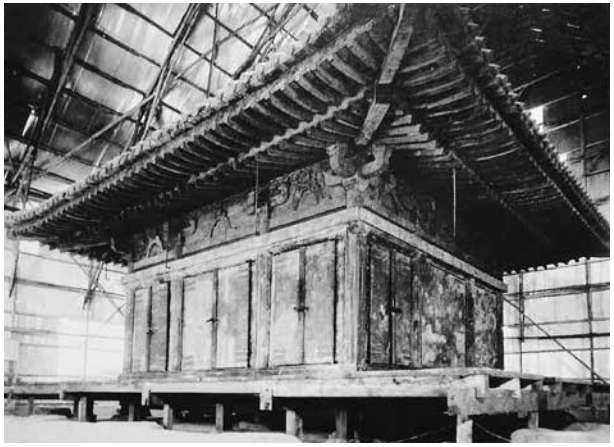
というような文章を書いています。唐の時代から次第に日本に入って、それで平安時代にかけて装飾の意匠に使われた花紋であると。これはもう、金色堂がその典型的な例だと思います。で、「花紋が華麗であるので、宝相華の名で呼ばれるが、実在の花ではない。インドの花紋が、チャイナ（中国）に入るにしたがって、次第に想像を加えて作り上げられた花紋である」とも。また、「平安後期に盛んな花紋、藤花が宝相華の単純化された文様」という解説もあるようです。

佐々木　それではこの辺で、心にのこる一句をご紹介して、本日のディスカッションを結ばせていただきます。ありがとうございました。

光堂より一筋の雪解水（ゆきげ）

有馬　朗人

（昭和六十二年『天為』）



修理前の金色堂（東北面より）

金銅迦陵頻伽文華鬘（部分）

金色堂須弥壇八双金具

中央壇正面上框（うわがまち）中央部

西北壇正面上框中央部

西南壇正面上框中央部

国宝金色堂大修理
五十年を迎えて

菅原光聴

平成三十年は国宝金色堂に対する昭和の大修理が竣工して五十年という節目の年でした。この修理は、昭和三十七年より四十三年までの七年間、国庫補助事業として行われたもので、建物全体を解体し、内陣部材を東京国立文化財研究所（当時）に移送するという創建以来未曾有の規模となる事業でした。この修理によって輝きを取りもどした姿が、現在、私たちが目にする金色堂なのです。杉木立の先の覆堂が木造から鉄筋コンクリート造に変わったのもこの時でした。

中尊寺では金色堂大修理五十年という記念すべき年にあたり、あらためて金色堂の宗教的、文化的意味について研鑽を深め、発信して行こうといくつかの取り組みを行ってまいりました。

まずは中尊寺山内の僧侶を対象に三回にわたって勉強会を開催いたしました。

第一回目は平成二十九年十一月二十八日、小西晫也先生（小西美術工藝社元社長・うるし博物館館長）をお招きし、五十年前の修理の際のエピソードについてお話いただきました。小西先生は小西美術工藝社の役員（当時）として金色堂の漆工修理に携わり、皇居宮殿、京都御所や赤坂迎賓館の漆工修理なども手がけられた斯界の第一人者です。金色堂大修理の貴重な当事者のお一人としてのお話に、あらためて国内の美術工芸史における金色堂の意味について学ばせていただきました。

第二回目は翌年二月二十二日、加島勝先生（大正大学教授）と多田孝文先生（大正大学元学長・同名誉教授）に講師をお願いいたしました。加島先生には金色堂の仏教美術について、国内外の美術工芸品に見られる意匠と金色堂をはじめとする中尊寺の工芸品との比較、また意匠の違いからみた金色堂須弥壇増設の変遷を中心にお話をいただきました。より広い視点と時間軸で金色堂の美術的意義について理解を深めることができました。多田先生には金色堂の

荘厳に表された教理的意義についてご講話いただきました。天井から続く螺鈿・蒔絵・瓔珞などの荘厳が

仏の無縁の慈雨を雨ふらし、いまだ迷いの世界にいる衆生をその機根に応じて悟りの世界へと導こうとする法華経の世界を、薬草喩品をもって表現したものである。

と、金色堂に込められた教えと信仰を、私たちが如何に解釈し現代の世の中に発信して行くか、大いなる示唆をいただきました。

第三回目は、三月三十日に三浦定俊先生（文化財虫菌害研究所理事長）に金色堂の保存環境についてご講義いただきました。金色堂は昭和の大修理の後、保護のため覆堂内に設けられたガラススクリーンに結露を生じ、金色堂の壁や長押等の漆箔にも亀裂や剥離が見られるようになってきていました。

そこで昭和六十一年より「国宝中尊寺金色堂保存施設調査委員会」を設けて検討を重ね、覆堂スクリーン内の断熱と防湿・調湿を目的とした保存施設の改修工事を行いました。当時、東京国立文化財研究所に在籍しておられた三浦先生はこの委員会の調査員をお務めいただき、改修工事後も金色堂の保存環境についてご指導やデータの計測をお願いしてきました。

五十年前、金色堂を後世に永く伝えるべく本体修理と並行して行われた保存施設整備は当時としては先進的なものでしたが、文化財の護持とは一時の修理に留まらず、継続的な維持管理と更新作業によって成り立つものであることをあらためて認識いたしました。

山内の勉強会に続いて、四月三十日には金色堂大修理五十年記念シンポジウム「浄土の荘厳とみちのくの山河」を開催し、遠近からおよそ二百名の方々に聴講いただきました。

第一部は「桜と月と金色堂」と題して浅見和彦先生（成蹊大学名誉教授）にご講演いただきました。先生は、西行が平泉束稲山の桜を奈良吉野に比肩するものと詠嘆したことを紹介し、京中心の地方観でものを見る当時の都人とは違い、美しいものは美しいと直感的に詠じた西行独特の感性が表れたものだとされました。また歌枕に詠まれた「壺

の碑」に坂上田村麻呂が「日本中央」と記した伝説を通し、広い視野で東北・平泉を中央と捉えた奥州藤原氏の考えが中尊寺の「中」の字にも反映しているのではないか、そして東京や上方中心だけではないグローバルな視点で地図を見ることの大切さを説かれました。

さらにシンポジウムの前日に訪れた「骨寺村荘園遺跡」に触れ、中世中尊寺領の面影残る田野の曲がりくねったあぜ道や山の稜線といった曲線の景観が、近代以降の直線文化に対して人に懐かしさや安らぎを与える日本の原風景だと述べられました。

第二部は「金色堂の荘厳と寺観」をテーマにパネルディスカッションが行われました。パネリストに講師の浅見和彦先生、そして先般の山内勉強会で講師をお願いした小西晫也先生と加島勝先生に加え、梅津章子先生（文化庁文化財調査官）をお迎えし、佐々木邦世氏（中尊寺仏教文化研究所所長）がコーディネーターを務め、各ご専門のお立場から提言いただきました。小西先生は、最も難しい内陣廻りの漆工芸は松田権六先生の号令一下で日本工芸会に属する明治・大正生まれの優れた工人たちによって修理がまとめ上げられ、外陣廻りは日光東照宮で長年修理に取り組んできた工人たちが修理前の古い漆膜を生かしながら新しい金箔を押し金色堂を甦らせてくれたと回想されました。

また近年は摺貝や金箔の業者も当時と比べ激減しており、良い職人と修理資材を集めることができた当時でなければ、あのような修理は不可能だったと述べられました。

加島先生は「宝相華文」に着目され、日本仏教美術におけるその変遷と金色堂の金工、漆工に見られる文様の細やかな観察により、中央壇から左右壇へ到るその変化を解説されました。「宝物はよく見る人には色々な事を教えてくれるが、通り過ぎてしまえば何も教えてくれない。」と、ものと対峙し観察することの大切さをお話いただきました。

梅津先生は金色堂の修理の変遷について、中・近世の修理は文化財を護るというよりは堂の機能を維持・追加するための日常的な修理であり、明治の修理は最新の技術と材料を駆使して構造を補強したが漆工部分は大きな改変は行われず、昭和六年の金色堂修理は明治修理の補強、鉄材撤

去や基礎部分の免震的措置等が行われたと、時代を追って説明されました。そして昭和三十七年からの解体大修理では、予め五分の一スケールで堂の復元検討や精緻な調査が行われた後、解体された内陣部材を東京国立文化財研究所に移送し、宝珠、失われた金具等も復元され、さらに鉄筋コンクリート造の新覆堂が新設されるなど英断ともいえる大規模なものだったとされました。

一方で、現在の文化財修理ではあまり斬新なことは行わず、過去において保存されてきた状態を維持、乃至はその建物にとって一番よい状態に戻すという方針が取られ、金色堂の今後の保存においても五十年後、百年後に適切な修理をしたといえるものにするために、今やったことが将来どのように影響してくるのかを見極め、五十年前の修理の考え方も蓄積して検討してゆきたいと述べられました。

浅見先生は環境日本学のお立場から、雪見障子や茶筒など繊細な湿度の差を利用した日本文化のあり方に触れ、湿度を排除せず活かす形で保存して行く方法はないのかとの見解を述べられました。（基調講演とパネルディスカッションを本誌に収録しております）また、シンポジウムの翌日五月一日には恒例の藤原四代公追善法要を、金色堂大修理五十年記念法要として厳修し、講師・パネリストの先生方始め有縁の皆様にご参列いただきました。

以上のように、金色堂大修理後五十年を記念して様々な見地からゆかりのある方々にお話を伺う機会を得た一方、金色堂そのものの護持について考えてゆく取り組みも始められています。金色堂は大修理を経て後、先述のような保存施設改修が行われ、現在は保存環境も安定して劣化が進行する状況は回避されたかに見えます。しかし大修理後五十年の間には規模の大きな地震も複数回発生し、劣化が緩やかに進行している部分も見てとれます。こうしたことから中尊寺では幅広い分野の有識者からなる「国宝中尊寺金色堂保存環境調査専門委員会」を発足させ、金色堂を永く護持して行くための保存方針の検討に入りました。

委員長に濱島正士先生（文化財建造物保存技術協会顧問）、委員に窪寺茂先生（建築装飾技術史研究所所長）、三浦定俊先生（前述）、室瀬和美先生（漆芸家・重要無形文化財保持者〔蒔絵〕）と中尊寺事務局から私が加わり、オブザーバーとして文化庁、東京文化財研究所、文化財建造

物保存技術協会等の諸氏にご参加いただきました。委員会では過去の修理や調査を再精査し、昭和の大修理後の金色堂の保存環境や劣化の実態把握、その原因究明と今後必要となる修理や処置を見極めるための新たな調査などの検討がなされています。もっとも重要で難しい課題は、建造物であると同時に美術工芸品でもあること、また何より「信の荘厳」（信仰の対象）であるといった、金色堂の内包する多くの側面をいかに保存・修理の方針に統合してゆくかということに他なりません。そして五十年後、百年後、来たるべき大修理の際にも、今回の委員会の方針が評価され、逆にマイナス要因になってしまわぬよう最善かつ謙虚に考えてゆく必要があります。

また、金色堂大修理五十年を顕彰する取り組みとして、讃衡蔵において「国宝金色堂大修理の記録」展を同年九月十五日から十一月十八日まで開催しました。前述した昭和の大修理にあたって作製した五分の一スケールの金色堂や蒔絵・螺鈿の修理手板、金色堂巻柱に描かれた菩薩像の復元トレース、修理当時の記録写真、技術の保存・継承のために復元製作された金色堂内陣巻柱等を展示し、多くの参拝者の方々に、あらためて金色堂の荘厳と文化の継承について紹介いたしました。

さらに、九月三十日には「国宝金色堂大修理五十年慶讃如意輪講式法要」を厳修いたしました。藤原秀衡公の御母が延暦寺澄憲僧都に依頼して作成した「如意輪講式」を、約八百五十年ぶりに法要として音用と読み下しを復元する取り組みが平成二十六年より始まり、専門諸氏のご協力を仰ぎながら遂に全七門の復元が完成し、法要として再現されたのです。

金色堂は奥州藤原氏の遺された有形無比の文化遺産であり、一方で如意輪講式はまさに無形の文化遺産であります。この二つの遺産を顕彰する法要が円成（えんじょう）されたことは、中尊寺にとっても大変意義深いものでした。（如意輪講式について50ページ、海老原廣伸先生にご寄稿いただいております）

金色堂は天治元年に上棟され、五年後には建立九百年に祥当いたします。そしてその後、二年おきに中尊寺落慶供養九百年、藤原清衡公九百年御遠忌と大きな節目の年が続いてまいります。

みちのく蝦夷と中央貴族藤原氏、二つの血を宿して生誕された藤原清衡公が、前九年・後三年の戦いを省み、仏の慈雨によってすべての生ある者を浄刹に導かしめんと、みちのくの中心に建立したのが中尊寺であり金色堂であります。九百年のいにしえより今日に到るまで清衡公始め奥州藤原氏四代公が常住する無双の堂宇・金色堂。この堂に刻まれた藤原氏の祈りと、それを現在に伝えて来た九百年にわたる人々の思いを継承し、未来に伝えてゆくことが中尊寺の第一の責務と存じます。

（執事長）

旧覆堂に護られていた頃の金色堂（昭和の大修理前撮影）

中尊寺の「如意輪講式」復元とその経緯

海老原　廣　伸

関山中尊寺における奥州藤原氏の第三代藤原秀衡公の母なるお方の発願によって比叡山僧澄憲に依頼をされた「如意輪講式」が、七門の式文として存在していることを、中尊寺仏教文化研究所『論集』創刊号において中尊寺一山円乗院住職佐々木邦世氏は、次のように発表されていました。

「よみがえる「信の風光」――秀衡の母請託『如意輪講式』を読む」と題し、

「平成四年十一月、京都嵯峨の大覚寺から『大覚寺聖教目録』が発行された。嵯峨美術短期大学綜合美術研究所の編纂である。その目録に『如意輪講式』鎌倉後期／巻子本と記載があって［奥書］に陸奥の秀衡の母が延暦寺の澄憲僧都に制作を依頼して誂えたものであることを伝えている…」と。

また、インターネットの百科事典では

平泉の文化遺産として、当初の登録名は「**平泉の文化遺産**」で、京都に影響されつつも、それと比肩しうる独自性を持つ優れた地方文化を発展させていったことや、かつての重要な政治拠点でありながら、奥州藤原氏の滅亡とともにその重要性を失い、開発にさらされることなく当時の姿を保存している点が評価された

(Wikipedia)

この「平泉世界遺産登録」という記事が新聞やテレビで大きく報道された頃から中尊寺貫首山田俊和大僧正は、「世界遺産というものの文化とは？」という課題を念頭に置いて、その模索が続いていた！と当時を振り返って話をされ、苦悩していたご貫首はその当時に佐々木邦世氏の「如意輪講式」というテーマが脳裏に浮かび、早速に相談をされたのが、京都大原の魚山声明の第一人者天納傳中大僧正であったと、伺っておりました。

この如意輪講式全門七門を法要形態に作り上げて、中尊寺の法要としての「中尊寺如意輪講式」法要に仕立て上げられないだろうかと。

しばらくされて、そのテーマに取りかかられた天納傳中大僧正様は、早速に「第一観音本源門」の一部に声明譜（博士）の作譜をし、大僧正様ご自身でお唱えしＣＤに録音をされました。

しかしながらその頃天納大僧正はご体調を崩され、続きの文言にたいしての譜付がなされないまま時が流れ、そのお仕事には手をつけることはありませんでした。

「世界遺産登録五周年」という大きな節目を前に、山田貫首は、どうにかしてこの講式を発表したいという熱意を消すことが出来ずに居られたようで、東京で私がお目にかかった際、雑談の中から「天納大僧正の途中で止まっている中尊寺如意輪講式の法要仕立ての続きに取り組んでもらえないか？」との会話になりました。

天台宗における講式は比叡山横川の元三大師堂で行われている「六道講式」の他、「涅槃講式」・「上宮太子講式」などありますが、天納大僧正の節をテープでお聞きした中からこれは、六道講式の音位・旋律に似ていないか！と感じながら仲間の専門知識のある方々にも相談をしてみることになりました。千葉大教授柴佳代乃先生と東京芸術大学講師・音楽学博士の近藤静乃先生に相談を致し、更に北総教区東栄寺住職室生述成師にも加わってもらい小さなプロジェクトがうまれた…という経緯がありました。

初めての会合において、山田貫首から諸先生に対して再度細かな説明がなされ、出来れば、五周年の時期に法要として奉修したいという要望をお聞きしながらも、先ずは、文言の運筆について解読するという事の困難から始まり、一門ごとの修正と意見の交換を中尊寺の佐々木氏とのあいだで、電話とＦＡＸでのやりとりでありました。

「第一門」で相当に時間を費してから、七門まで全文を解読し音位を施すという作業は、とても

期待される期日に間に合わないとの判断から、柴先生に古い文献にも見られるような「極略三門仕立の如意輪講式」の例題を提案され、中尊寺からご賛同を頂き、平成二十八年六月、中尊寺世界遺産五周年記念に「極略如意輪講式」を広くメディアも通して発表されました。

その後、残りの四門に取りかかりながらも中尊寺年中行事や、叡山講福聚教会東日本奉詠舞大会などの開催地としての事業が重なったりして、漸く平成三十年九月三十日、如意輪講式七門全門を完成して、法要が営まれました。

中尊寺が、「世界遺産」という大きな栄誉をお受けになったご縁で、藤原氏の隠れた大きな遺産が表に出る機会が与えられました。

そこには、論集の創刊号に出された佐々木邦世先生の論文を山田ご貫首が「中尊寺の文化」として取り上げられた事、そしてその論文を元に法要儀式形態にされようと中尊寺ご一山と毛越寺ご一山そして多くの方々の意思と意欲と結束力が重なって、地域の方々や信徒・檀徒のかたがたのご縁が一つになったからこそ、出来上がった法要「如意輪講式」であろうと思っております。

ここで、七門を完成は致しましたが、課題は「生んだ子供をどのように育てていくか?」というテーマが生まれます。

法会儀式が復元されるという事柄は、比叡山のようなお立場ではないお寺においてはあまり目にすることはなく、最新でも比叡山横川での「六道講式」ではないかと考えますと、今回の「如意輪講式」を法要仕立てに仕上げたこと、ご本山以外の場所での復元法要という式次第に組み立てたことは非常に希有な事態でありました。

そこには、古来みちのく（道の奥）の、藤原氏の遺風を讃仰する環境があり、また近年の世界遺産という大きな後ろ盾があったからでもあります。

さりながら、この法要を行うことは内容的にも時間的にも多くの人とお稽古の場が必要になり、常に「如意輪観音信仰」という心に携える気持ち

を保持し続けるという、心の支えが重要であります。

その信仰を持続していく為には、比叡山の「不滅の法燈」も分灯され護持されているように、この法要もご縁を持って頂く寺院の認識・協力を得て、年中行事として執り行うことが大事な観点であろうかと思っております。

例えば、「精霊会」という行事は法要次第的には、いろいろあります中で、関西方面で行われているこの行事には、行列とか舞楽・雅楽といった音と動きを取り入れての法会になっておりますし、歴史的にはその様な形式は他でも取り込まれてきています。

音と動きという動作は「仏教の法会」「天台宗の法会」というジャンルだからこそ、上品に美しく仕上げられる法会でないかと思っています。

中尊寺の如意輪講式という法会も、地域社会にも溶け込める形に変えて、本質を伝承していく、アレンジも必要という考えもその一つにあるかもしれません。

比叡山の中で、また、お堂の中でのみ行われていた！ いや行わなかった法要儀式という形態を、五十年も前に天台宗比叡山や真言宗豊山派の皆様は国立劇場の舞台、という道場で行ったという経緯を観るとき、これから先の仏教儀式も、それなりの品性を保ちつつ地域社会を始め、多くの人々からも仏心を感じていただきながら、楽しい、心安らぐ仏教行事として、形を変えても、この如意輪講式が親しまれ継続され続けていかれますことを、心から念じる次第であります。

合掌

えびはら　こうしん
千葉県　天台宗　泉養寺前住職

第五十七回平泉芭蕉祭全国俳句大会　特別講演

「古典に学ぶ俳句の韻律」

講師　片　山　由美子 先生

皆様こんにちは。ただいまご紹介に預かりました片山由美子でございます。

今日は「古典に学ぶ俳句の韻律」ということでお話しさせていただきますが、仰々しいタイトルほどには難しい内容ではありませんので、どうぞ気楽にお聞きください。

俳句・短歌などの韻文は、散文と何が違うのか、ひと言でいえば音楽のようにリズムをもっているということです。

高浜虚子に

帚木に影といふものありにけり

という有名な句があります。これは、意味を考えてみると極めて単純というか、帚木に影があるというだけのことなのですね。散文で言ってしまえばほとんど意味もないような、わざわざ言うほどでもないことが、「帚木に／影といふもの／ありにけり」と、五・七・五のリズムに乗ると一つの世界として浮かび上がってくる、これが俳句の妙味なのですね。リズムに乗せていかに表現するか、これが、俳句の一番大切なところだろうと思います。

五・七・五が俳句の定型ですが、では、字余りの句というのはどうなのか。歳時記の例句を見てみますと、けっこう字余りの句があるのですね。虚子の

白牡丹といふといへども紅ほのか

という有名な句も、実は字余りです。余りは本当に駄目なのでしょうか。

字余りにしなければならない必然性、あるいは字余りだからこそ表現できることもあるのです。

今回は、芭蕉ゆかりの平泉にお招きいただきましたので、まず、芭蕉の字余りの句のことを考えてみたいと思います。

講演の様子

芭蕉の句には字余りがかなり多いです。いくつか例を挙げました。

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉

最初の句、これは別の形も残っていますが、推敲した結果、結局、字余りの句が残ったということが「三冊子」に書かれております。

「芭蕉野分して」という風に「して」を入れたところが、芭蕉の狙いです。

五・七・五ではなく、八・七・五になっているのですが、「芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉」これを耳で聞きますと、字余りであるという違和感はないですよね。むしろ「芭蕉野分して」とちょっと早くいう、ここが効果的ですね。

「字余り」というと、はみ出しているような印象を受けますけれども、「余る」のではなく「圧縮」する。「ばしょうのわきして」と早く言うことによってそこが強調されます。字余りの一番の表現効果というのは、そこを際立たせることにありますが、それがこの句には顕著です。

夜ル竊ニ虫は月下の栗を穿ツ

「夜ル竊ニ」、この難しい字（竊）は「ひそか」と読ませます。片仮名になっている部分は送りです。「よ」ではなく「よる」と読ませますよ、という。栗名月は十三夜の異名ですね。「和漢朗詠集」に「夜雨偸穿石上苔（よるのあめはひそかにせきじょうのこけをうがつ）」という一節がありまして、それを下敷きにしている句です。この句も最初の「よるひそかに」を早く読み、後はゆったりと「むしはげっかのくりをうがつ」と読みます。

櫓の声波ヲうつて腸氷ル夜やなみだ

けっこう長いですね。「ろのこえなみをうって」ここは長くて「はらわたこおる／よやなみだ」上五にあたる部分が十音になります。「ろ・の・こ・え・な・み・を・う・っ・て」ですから、上五の部分が二倍になっています。かなりイレギュラーな調べですが、こういう句を作るということは、芭蕉は定型というものをかなり自由に考えていた証で、基本的には五・七・五のリズムを感じながら、そこに長いものを詰め込む。人間で言えば体内時計のような一定のリズムがあるのですが、それを破壊しない範囲なら多少長くても大丈夫、そういう作り方なのですね。これは漢詩文から影響を受けております。

これどこで作ったかといいますと、深川の芭蕉庵に移ってからの句です。昔は深川の水が凍ったということがわかりますね。江戸は寒かったと思います。暖房がないような庵で、外も寒々とした波の音を聞いているんですね。

いづく霽傘を手にさげて帰る僧

これ（霽）霧が晴れるというような意味で使いますけれども「しぐれ」と読みます。何処がしぐれているのだろう、「いづく霽」で切りまして「傘を手にさげて帰る僧」。目の前にはもう雨が降っていないのです。お坊さんが滴の落ちている傘をたたんで、持って歩いている。それを見て、どこかで時雨にあったらしい、と思ったわけです。

夜着は重し呉天に雪を見るあらん

この句は字余りなだけでなく、ちょっとゴツゴツしています。夜着「呉天」というのは「呉天の雪」というフレーズが漢詩にあるのですね。それを借りてきまして「夜着は重し…」。自分は夜着をかぶって寝ていますから、外の気配は分からないですけれども、この寒さでは雪が降っているだろうなあ、そういうことを思っているという句です。

次は…これは「髭」ですね。

髭風ヲ吹て暮秋 歎ズルハ誰ガ子ゾ

杜甫の詩文で、白帝城を詠んだ詩があります。「杖藜嘆世者誰子（藜杖世を嘆ずる者は誰の子ぞ）」藜というのは藜の杖のことですね。「髭風ヲ吹いて暮秋 歎ズルハ誰ガ子ゾ」こういう、一見俳句らしからぬ字余り、こういうものも芭蕉の字余りの特徴です。

狂句木枯らしの身は竹斎に似たるかな

これは色々前置きがあるのですけれども、竹斎というのは「仮名草子」に出て来る主人公ですね。で、その主人公の事を自分になぞらえて、みすぼらしい姿に、それを自ら戯画化している、そういう句です。「狂句木枯らしの…」ここまではわざわざ漢詩文調を取り入れた字余り、ということになっております。

また、内容によって、これはどうしても字余りにしたいという、そういう句もあります。これも皆さん、よくご存じだと思いますが、

あら何ともなやきのふは過てふくと汁

面白いですね、これはむしろ滑稽味のある句です。夕べ、河豚を食べたので心配だったけど、目が覚めてみたら何でもなかった、ああ良かったという句です。無事に一日が過ぎて大丈夫だったらしいという。この「あら何ともなや」は、当時そういう言い回しがあって、それを借りてきております。「あら何ともなや」これ軽いですね。

蕣や昼は錠おろす門の垣

芭蕉の甥に桃印という人がいました。この桃印

を非常に可愛がっておりまして、桃印が江戸に出てきてからは父親代わりになっていました。寿貞尼という女性の存在が知られていますが、これは芭蕉の隠れた女性だったのではという説もあれば、実は桃印と関係もあったとか、色々な説があります。いずれにしても桃印を非常に可愛がっていましたが、芭蕉よりも先に亡くなってしまうのですね。その桃印の死を嘆く句なのです。「朝顔」というのは桃印のことで、彼のことを思いつつ人にも会わずにずっと草庵に籠っているという句です。

手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜

これは芭蕉が江戸に出ていた間に、お母さんが伊賀で亡くなってしまいます。久々に伊賀に帰った時に、お兄さんの家でお母さんの遺髪を見せられるのですね。それを見て涙したという句ですが、この「秋の霜」というのは、お母さんの白髪の遺髪を比喩的に表現している。死に目に会えなかった母親の髪の毛を手にして、それを嘆いている。堪えきれない思いが字余りになっているのです。

さてつぎに、現代俳句の字余りの例を見てみましょう。高浜虚子にこんな句があります。有季定型派の俳人が作った句で一番長いのではないでしょうか。

凡そ天下に去来程の小さき墓に参りけり

かなり長いですね。お・よ・そ・て・ん・か・に…」と数えますと二十五音になります。五・七・五は十七音ですから八音も余ってしまうことになります。

これを五・七・五のリズムの中にどう収めていくか、長いところは早く読むといっても「凡そ天下に去来程の…」はちょっと無理があります。虚子がこんな句を作ったのは、こういう字余りでも、基本的な五・七・五の俳句のリズムの延長線上にあると考えていたということでしょう。

山口誓子も意識的に字余りを使っている句があります。

鵜死して翅拡ぐるに任せたり

これは「つ・ぐ・み・し・し・て／は・ね・ひ・

ろ・ぐ・る・に／ま・か・せ・た・り」と、六・七・五になっていますが、これもさっき言ったように、余っているところは早く読むんですね。「つぐみしして」は五音のようになります。

ひとり膝を抱けば秋風また秋風

これも、「ひとりひざを」これがリズムに乗って聞こえる。五・七・五は決して一音一音数えるのではないということですね。

リズムに関して非常に大事なものに「句またがり」があります。芭蕉の句として一つ例を挙げてみました。

海暮れて鴨の声ほのかに白し

普通に読めば「海暮れて／鴨の声／ほのかに白し」と三段切れみたいになっちゃいますよね。自然に読めば「海暮れて／鴨の声ほのかに白し」となります。「ほの／かに白し」と中七から下五にかけてまたがるので、句またがりというのです。句またがりというのは和歌の時代からありますけれども、特に俳句では効果的だと思います。五・七・五で言おうと思えば「海暮れて／ほのかに白し／鴨の声」とすることもできます。すんなり収まるんですね。単に意味を伝えたいだけなら、その方がよほどスッキリします。それを何故芭蕉がこういう形にしたか、それを考えたいと思います。

句またがりというのは、そこに特殊な効果が生まれます。「ほのか」という一つの言葉が分断される事によって、そこはアクセントがつくのです。

それから聴覚の効果としてもうひとつ。「オノマトペ」というのがありますね、擬声音とか擬態音とか。これも芭蕉で見てみますと、有名な句では

ぴいと啼尻声かなし夜の鹿

これは実際、ぴいと啼きますけれども、確かに、鹿の声というのは何処か物悲しいですね。本当に美しい甲高い音でピーと啼くんです。「ぴい」というのは単純なようでありながら、如何にも鹿らしいと思います。

露とくとく心みに浮世すゝがばや

吉野の奥に、西行は庵を結んでいたのですけれども、近くに「とくとくの泉」というのがあります。今では皆さんこれを汲んで、西行を偲び、芭蕉がこれを詠んだのだと納得するわけです。ですから、この「とくとく」というのは、単なるオノマトペではありません。

どむみりとあふちや雨の花曇

あふち（楝）の花というのは、もともと南の植物ですね。栴檀（楝は栴檀の古名）、とても大きな木です。薄紫の花が、そうですね晩春の四月から五月くらいにかけて咲きますけれども、空がこう、うっすらと薄紫になるような、そんな細かい花がたくさん咲くんです。「花曇」を楝の花に見たてて、複雑な楝の雨の花曇という言い方をしているのですけれども、この「どむみりと」はなるほどと思いますね。今の言葉で言えば「どんより」でしょうけれど、その「どむみり」という、この重い感じが活きているなと思います。

ほろほろと山吹ちるか滝の音

山吹が散りかかっている、ほろほろと。これは別に難しい言い方ではありません。芭蕉はあんまり凝ったオノマトペは使ってないですね。山吹がはらはらと花弁が落ちかかる様子を素直に表現している。

ひらひらとあぐる扇や雲の峰

ひらひら、は扇の動きを表現している、これはなかなか洒落ているなと思います。この「ひらひら」なんですが、ちょっと飛びますけれども、闌更という人に

月ひらひら落来る雁の翅かな

という句があります。皆さんよくご存知の

ひらひらと月光降りぬ貝割菜（川端茅舎）

に似ていますね。

俳句を始めたばかりの頃、いくつか感動したことがありますが、一つはこの茅舎の句です。蝶々がひらひら、とか言ったら何の芸もないですが、月光がひらひら、これは素晴らしいと思いました。

「ひらひらと…」こんな素晴らしいひらひら、という使い方があるのか、と長年思っていましたら、その後闌更の句を知ったのです。百年も前にこんなことをやっている人がいたと。

この「ひら〳〵」は雁の羽ばたきにもかかっているし、月のことも両方言っているような感じですね。月に雁というのは梅に鶯みたいなもので、即き過ぎの取り合わせなのですけれども、これは、非常に美しい描写だと思うのですね。夜飛んでいる雁、その羽の動きに月が降りかかっているという、まさにこれは絵に描けるような句だと思います。その動きを「月ひら〳〵…」月と雁という月並みなものを神聖に描いている所為だ、というので私は、これは決して陳腐な句ではないと思いまして、「ひら〳〵」に大変感動しました。

こういうオノマトペを使う場合に、小川がさらさらとか、そういうのは全然だめなのですけれども、使い古されたような言葉をどう新鮮に使うかが問われます。

菜の花にくるりくるりと入り日かな

蒼穹という人の、この「くるりくるり」も面白いと思うのですね。お日様は別にくるりくるりと、そんなに動くわけじゃないですけれども、菜の花畑に大きな夕陽が沈んでいく時の感じですね。まるで何だかこう、くるくると動きそうな真ん丸なお日様が沈んでいくという。それを「くるりくるり」と言ってみせた。

によっぽりと秋の空なる不尽の山（鬼貫）

秋晴れの日に富士山がくっきりと見えたのですよ、それを「にょっぽりと」という風に詠んだのですね。大変ユニークなオノマトペですが、逆にどう言い換えたらいいかというと、なかなかありませんね。「くっきり」だけではつまらない。「ぬっ、と現れた」でもない。「にょっぽりと」というのが楽しいです。

それから惟然という人、この人もなかなか面白くて

水鳥や向ふの岸へつういつい

確かに、これ鴨か何かですね。進んで行き方、

ちょっとこう、まっすぐに行くわけじゃなくて、こうギッギッしながら進んでいくような動きを「つういつい」という風に詠んでおります。

水さつと鳥よふはふはふうはふは

これも面白いですね。一茶がこの惟然の句をお借りしまして、これを生かしております。

むまさうな雪がふうはりふはりかな

これ、前置きに惟然の句に学んでという事を書いていますけれども、よほど「ふはふは」が気に入ったらしいですね。確かに、牡丹雪がこう、落ちて来るとき「ふうはりふはり」そんな感じしますね。「むまさうな雪」というのが一茶らしいです。

ざぶりざぶりざぶり雨降るかれの哉

枯野が溺れそうになるくらいに凄い雨が降っている。こういう、ざぶりざぶり、という雨の降り方を一茶は詠みました。他にも沢山あると思いますけれども、オノマトペだけを抜き出して句を詠んでみますと、そういうのも面白いです。

それから、繰り返しですね。「リフレイン」と言いますけれども、同じ言葉を何度も重ねる、これも短い俳句では非常に効果的です。

草いろいろおのおの花の手柄かな（芭蕉）

いろいろ、おのおの、あまり意味のない言葉を重ねることによって効果を上げている。「草いろいろ花の手柄」「おのおの花の手柄」だけでなく、「いろいろ」と「おのおの」どちらかといえば重複してしまいそうな言葉を重ねている、こういう方法もあります。

山吹や葉に花に葉に花に葉に（太祇）

早口言葉じゃないですけれども、これは先程、芭蕉の句に「ほろほろと山吹ちるか滝の音」とありますけれども、まさに山吹の散り方ですね。一枚一枚の花弁が、葉が落ちてゆく。よく見ると動詞が一つもない、動詞を使わずに描くと俳句というのは逆に動きが良く見えてくる。散る、ということも言ってしまうと、面白くないですね。そういう省略、繰り返すということで逆に何かを省いているわけです。非常によく出来た俳句ですね。

最後に、昨日からご案内していただいた感想を述べさせていただきたいと思います。世界遺産になって、たくさんの方がこの平泉にいらしていると思います。外国からも沢山の方がいらっしゃっている。しかも、ここで初めて芭蕉のことを知るのではなくて、すでに芭蕉のことを知り、予備知識を持ってやってくる。あ、これが芭蕉像だ、これが芭蕉さんなのか、という風に思われる方が沢山いるということを伺いました。

平泉の歴史を護りつつ、これからも世界に向けて発信していっていただきたいと思います。

（拍手）

プロフィール

かたやま　ゆみこ

千葉県生まれ。「香雨」主宰。

句集　「風待月」「香雨」（俳人協会賞）など。

評論　「俳句を読むということ」。

毎日俳壇選者

○まだもののかたちに雪の積もりをり

○待つ人のゐる明るさの春灯

高館と北上川

［好著光風］

吉丸蓉子著「赤い経巻」とは何か
宮沢賢治と法華経

佐々木　邦　世

宮沢賢治が法華経に帰依する動機となった仏書。島地大等著の『漢和対照 妙法蓮華経』で、それが赤い布で装幀されていた。

宮沢家は浄土真宗で、弥陀本願の名号を信受しお念仏を縁（よすが）としていたが、賢治は「身の置き処もこれ無き次第」と言い、「あきたらず」思って、法華一乗の経文・宗風に惹かれてゆく。その賢治を手掛かりに探りながら、著者も『対照 法華』をひもとき、島地による「法華大意」を読む。

われわれも、本書のページを捲りながら、著者と一緒にその辺を理解していることに気づく、といった次第になる。

表題の所論のほかに、

童話「やまなし」考―童話になった法華経―
「雨ニモマケズ」考―賢治と維摩経―
「雨ニモマケズ手帳」考―賢治の曼陀羅―
童話「ひかりの素足」考
―賢治と地獄極楽思想―
童話「よだかの星」「二十六夜」考
―涅槃と捨身―

など。そして、「利他の祈り」―法華経の行者宮沢賢治―と題して、著者自身が理解した窓を一つひとつ明けながら、平明なことばで述べている。従来の、よく目にする仏教書の論述とは一味違った好著である。

難しいことをやさしく
やさしいことを深く
深いことをおもしろく

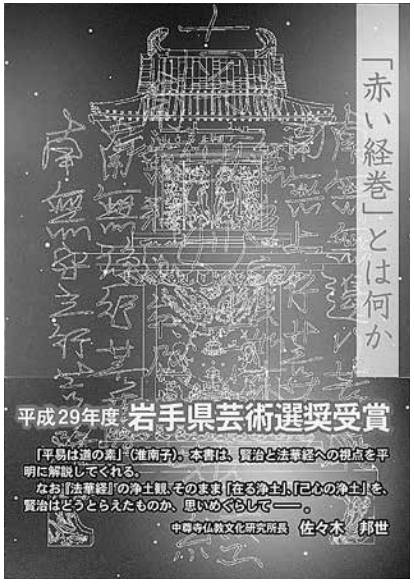
作家の井上ひさしが座右の銘としていたという。「おもしろく」は、感興の深い意味で、本書を読みながら直ぐに浮かんだのが、この銘文だった。

さらに、啄木・賢治研究の第一人者である望月善次氏が解説文を載せている。それが、いわゆる「解説文」の形から「相当逸脱」した、そう自認した上で踏み込んだ、「変則的」解説である。

本著は、平成二十九年度岩手県芸術選奨を受賞し、あらためて再版された。宗門とか郷土の域を超えて、読んでほしいと思う一冊である。

（中尊寺仏教文化研究所長）

著者　吉丸蓉子　プロフィール
平成十六年　岩手大学学芸学部卒業
盛岡市立桜城小学校校長を最後に教員を退職
平成二十三年　仏教大学文学部卒業
その後　盛岡市先人記念館長／市教育委員／盛岡大学客員教授など



（盛岡市　さわや書店）

磐井清水若水送り

佐藤育郎

「各々方に申し上げます。
今より凡そ八百年前、平安時代の末期に、奥羽鎮守府将軍藤原秀衡公の御諚により磐井清水を若水として迎えられました」

稚子父子により若水をくみ上げ（平成14年）

「本日正朝、只今稚子と父親により汲み上げられたこの若水を、これより五里、二十キロ西方の関山中尊寺に進上する次第であります」

「各々方に申し上げます、これより先は奈良坂峠、東岳峠を越え、北上川を渡り、たゞひたすらに平泉を目差すのであります　雨・風・吹雪に負けず、若水桶の底を地面につけずに中尊寺までお届けするよう、急度申し上げます」

午前二時、寒天に奏者の声がひびき渡る。子供も大人も一瞬の緊張を覚え、衿をただして行列を整える。

毎年、百五十から二百人の参加者は「出立ッ」の一声で五時間の若水送りが始まる。

先駈（さきがけ）―奏者（そうしゃ）―先達（せんだつ）―大先達（おおせんだつ）―若水桶（わかみずおけ）―守護（しゅご）―手繰（ぐ）り方―殿（しんがり）と、それぞれが役目。

提灯を高く上げて、文明の利器を一切つかわず提灯の灯ひとつで道中する。

桧笠に積る雪、眉に雪、狩衣の袖をしぼり黙々

中尊寺まで20キロ　途中、若水桶の底を地面に付けることなくかつぎ通す

と中尊寺をめざす。

途中、十ヵ所の番所で一服し、温かい煮物や甘酒、かん酒を頂戴し、力をつけて進みます。観音山や束稲山にしらじらと元朝の陽がさしはじまる頃、北上川にかかる高館橋を渡って、漸く柳之御所に到着する。

柳之御所で天高く火が焚かれ、平泉町長、観光協会や商工会、地元有志の方々の手厚いお出迎えを受け、若水送り一行は只ありがたく身をあたためて、衣服を整え、笠の緒を引き締めて本行列を開始します。

奏者は持鈴を鳴らし、一行は「六根清浄　御山繁昌」を唱えながら、松杖・梅杖をつき二人並びで月見坂を爪先上がりに最後の力をふりしぼる。中尊寺山門をくぐり本坊に着いた瞬間、あらたな緊張感を持って月の輪形に整列する。大玄関には貫首さまはじめ中尊寺一山の高僧方が絵巻の如くに並んで居られます。

第一回のときは菅原光中様に受けていただき、以来、千田孝信前貫首さま、そして現在の山田俊

山田貫首に「若水進上」の挨拶を申し上げる大先達佐藤育郎（平成20年大祭）

和貫首さまと、歴代の貫首さまに若水桶を進上。秀衡公のお声を聴く如く、貫首のお言葉に参加者はありがたく深々と一礼します。

金色堂に供えられた若水椀を目の前に、一行は藤原氏四代公にしずかに合掌。二十数年にわたり、中尊寺円乗院佐々木邦世さまより犒（ねぎら）いのお言葉を頂戴して、一行はまた来年も参加しようと力づけられます。

さらに、四年に一度の大祭の年は白山神社を参拝して、関宮宮司様の音頭で万歳を三唱。めでたく帰路につく次第であります。

近年は、青木幸保平泉町長、勝部修一関市長の年頭の挨拶を頂戴し歴史文化の伝承と地域づくりの大切さを認識する機会でもあります。

平成五年、磐井清水若水送りをはじめた切っ掛けは、ＮＨＫ大河ドラマ「炎立つ」が平泉を主体に放映されることを知った、当時の東山町長松川誠さんはじめ、地元有志の立ち上げでした。

中尊寺に失礼のないような催事にするにはと、

奈良に向い東大寺お水取り行事をおそわり、更に仙台大崎八幡宮の火まつり、出羽三山お山懸けを参考にして、この行列を仕立て上げたのでした。

そうした御縁で、昨年秋には中尊寺一山の各院御住職が磐井清水を探訪され、八百年前の姿を今に残す奈良坂峠の古道を歩かれました。道中に残る如意輪観音さまや石碑、道標等について平泉仏教文化との深さを学び、実にありがたく深く感謝する次第であります。

磐井清水若水送りは、間もなく三十回を数えることとなります。この行事が、さらに二十年、三十年と続くことを偏に祈念する次第であります。

磐井清水若水送り保存会長
さとう　いくろう

一関市東山の二十五菩薩、磐井清水を訪ねて

普段着の平泉

千葉　敏明

仕事の関係で以前から外国からの取引先を週末など時間の取れる範囲内で平泉を、時間、距離的に無理な場合には訪問先の顧客の近くで、関東や関西などで日本の歴史を感じてもらえる史跡などを案内していたため、平泉の世界遺産登録にあわせ、岩手県が行った外国語ガイド養成講座には良い機会と思い即決で参加しました。平泉で生まれ育ちながら地元を離れ、関東や関西、また海外で生活するまでは身の回りにある伝統や歴史を特に意識していませんでした。外に出て初めて故郷のかけがえのない自然や、豊かな歴史を再認識することになりました。平泉に戻ってからは貿易関係の仕事をしながら、時間の許す範囲内で主としてヨーロッパからのお客様に平泉を案内しています。

外国のお客様に案内するときには日本のお客様への説明とは違うアプローチをする必要があります。日本の歴史や文化に興味を持ち情報を持っている海外からの観光客は希で、日本人なら誰でも知っている例えば源義経、藤原三代や豊臣秀吉の名前を言っても九九パーセントわかってもらえません。また平泉の時代を西暦で説明しても、日本のお客様でも同じようなことがあるように、その時代に自分の国で何が起こっていたかを知る人は必ずしも多くありません。十二世紀のヨーロッパではどんな時代であったかもある程度知識として持っていて説明する事で時代背景をより理解していただけることになります。

当代の中央政府、東北の状況、藤原三代・平泉が成立した背景、義経・頼朝・鎌倉幕府との関わりなどの紹介をしながら平泉をより身近に知っていただくようにしています。

母国語ではない言語での案内はまた、日本語で表現するようにはいかないというハンディがありますので、お客様にどれだけ理解していただけたのかは案内が終わってから何時も気になるところです。それでも自分の生まれた誇りある平泉を外国のお客様に少しでも知っていただくことは大きな喜びでもあります。

ヨーロッパからのお客様は、多くの場合、個人、友人や家族での訪問で、時間的に余裕が有り、自由な雰囲気で見学し、案内もフレキシブルにそのときのお客様の気分や、思いつきに対応しながら、また世間話も交えての案内となります。中尊寺や毛越寺の建築物・庭園、国宝、歴史の他にも趣のあるヨーロッパでは絶対に体験できない景観や雰囲気、庭木、野生の草木、田畑などにも大きな興味を示します。案内しながら野生植物や昆虫の名前をもっと勉強すべしと痛感してしまいます。日本料理店でヨーロッパからの取引先と食事をするときも同じで、特に魚の名前の多さとその英語やドイツ語名の語彙数の不足には自己反省ばかりです。ただ、たとえ英語名を伝えたからと言ってそれで相手がわかるかというと、実は食べたことも見たこともない魚で結局はわかってもらえないケースがむしろ多いのが実情ですが。

日本のお客様からは絶対出ないような質問や疑問なども外国人の案内では多々あります。例えば千社札、鳥居やお地蔵様に置かれた小石、お地蔵様の赤い前掛け、供え物のらくがん、御幣等等。当たり前と思っていたことを質問され戸惑うことがよくあります。またお客様は日本訪問では日本人の生活そのものを知りたいという希望がありますので、案内だけではなく会話の中で情報交換することにより知っていただけることになります。

住む人々にとり当たり前の光景がお客様によっては素晴らしい観光資源になります。道ばたのたっぷりと水がひかれ青々と育つ稲、水田の蛙とそれをエサとして待ち構えるサギ、大きな葉のふき、照井堰の上を舞うホタル、秋の「ほんにょ（稲の天日干しの一種、棒掛け）」、赤とんぼ、民家の前の大根や白菜、畑や田んぼ作業をする自分も含めた農夫等等、このような風景は里山のある平泉のような田舎でしか体験できません。外国のお客様が東北に来る理由として、歴史が有り、親切

な住民、言葉は通じないなかでのコミュニケーションの楽しさ、大都会や有名観光地の雑踏を避け、人々の生活との接点が近い、また帰国してから誰もが知っているところではなく自分しか行ったことがない神秘的な所と自慢できるむしろ知名度の少ない地をリピーターは求めています。

私たちの普段の生活が見えるように、またよそ行きではなくできるだけ自分のペースで対応する事によりお客様もリラックスしてもっと日本が見えてくるようになり、日本の歴史に触れていただきお互いの国をより理解できるようになると感じています。

ちば　としあき
岩手ひらいずみ通訳・ガイドの会

ありのままに

南洞法玲

私が比叡山に修行に行ったのは、東日本大震災のあった平成二十三年の四月。二回目の大きな地震が起きた後だった。新幹線は動かず、花巻から伊丹までの飛行機が奇跡的に飛んだため行くことができた。「今、この地を離れてもいいのか」と悩んだが、師匠に「僧侶になったからこそできることもあるのだから」と背中を押していただいた。お陰で、無事満行し戻ってくることができた。そして、帰ってくるのと同時に、平泉が世界遺産に登録された。私の僧侶人生は、東日本大震災・世界遺産登録と共に年数を重ねていくことになったのである。それだけでも身が引き締まるし、これも仏様からいただいた一つの役割だと思っている。

そして今年、僧侶人生八年目を迎えるわけだが、これまで寺の中ではもちろん、外に飛び出したりして、なんだかんだとやりたいことをさせてもらっている。きっと毛越寺の先輩方はしょうがないなと両目をつむっていることだろう。ありがたいことだ。

私がこうなるに至った、影響を与えられた人物がいる。それが中尊寺の風雲児・破石晋照、その人である。

彼とは小中の同級生だ。学生時代、特に仲が良かったわけではない。正直、彼と会話をした記憶がない。本当に申し訳ないと思う。それでも彼は、僧侶になった私を気にかけてくれていたようで、ラジオで毛越寺のＰＲをして欲しいと声をかけてきてくれた。そこから彼との付き合いが増えていくことになる。

初めて二人で出演したのはコミュニティＦＭの番組だ。「収録だから気楽に」ということだったので、ありがたく引き受けた。ところが、始まってすぐ度肝を抜かれた。彼のトークがすごかった

のだ。「そんなにしゃべって、お坊さんとして大丈夫なの!?」と思うほど。思い描いていた〝法話〟のイメージが打ち砕かれた。また、そんな彼の勢いに押されてしまい、まったく喋れなかった。終わった後は魂が抜けたようだったし、帰り道は沸々としていたのを覚えている。そんな私の気持ちを知らない彼は、まだまだ話足りないと鼻穴を大きくしていた。

私の喋る時間が少なかったのはしょうがない。だが内容が僧侶の威厳などどこ吹く風。〝破石晋照〟と〝南洞法玲〟が世間話で大笑いしている。〝法話〟は遥か彼方へ行っていた。そしてそれが番組として成立したのだ。衝撃的である。この放送が流れた時、私の僧侶人生が終わるとまで思った。

ところが、いざ放送されるとこの話が好評だった。

同級生ならではの掛け合いが楽しく、お坊さんを近くに感じることができたという。これまた衝撃だった。ただ考えを改めてみると、中尊寺や毛越寺は格式高い・敷居が高いと思われてしまう、それを打ち破る突破口が見えた気がした。よって、しばらくは彼のやり方についていってみることにした。

その中でわかったことの一つが、〝自分らしく〟でいいのだということ。

これまで〝僧侶らしく〟と格好を付けて経典や高僧たちの言葉を使ったり、先輩方のマネをしていたが身の丈に合っていなかった。だがそうではなく、今の自分の考えを、ありのままで精一杯伝える。わからなければそれも正直に伝える。そうすると皆さんは耳を傾けてくださるし、伝わっている気がする。それでいいのだと思えた。理性が働き、彼のように砕けることはできないが、それでも、私なりの味は出てきたように思う。それも彼が引き出してくれたことだ。彼はすぐ調子に乗るのであまり言いたくないのだが、ここは素直に言っておく。感謝している。

こうして思い新たにした私は、背中に羽が生えたようにいろんなことに挑戦するようになり、彼と一緒に「晋照・法玲のわくわく法話」という二

人法話会もはじめた。二〇一六年から現在まで続けて開催できているのは奇跡だと思う。内容は相変わらずの同級生の四方山話。その方の人生の役には立たないかもしれない。それでも地域の方々にもっと平泉を、仏教を身近に感じてもらうため。また、このひと時を少しでも笑顔でいていただけるように、温かい気持ちで帰宅していただけるようにと開催している。ありがたいことに、いらっしゃるのは心優しい方々ばかりで、いつもにこにこしながら聞いてくださる。こんな私を受け止めてくれる。やっているこちらも幸せな気持ちになるし、こうした機会をいただけたことに心から感謝している。そしてその優しさに包まれたくて、私はまた、町にくり出していくのである。

なんとう　ほうれい
毛越寺一山　壽徳院住職

「遠つ淡海」からの便り

佐々木　邦　世
（中尊寺仏教文化研究所長）

浜松市にお住まいの間淵うめ子さんから、昨年いただいた手紙がある。その前文を読んでいただきたい。

「関山」二十三号を御恵送賜り誠に有難うございました。盛岡を去って以来三十五年、四、五回は盛岡の友と会う機会がございましたが、齢を考え一人旅はもうできなく、友も三人ほどとなり、その一人が小林輝子さんですので、何彼と岩手のニュースを、主に「俳句」ですが、懐かしく、俳誌「草笛」も読ませていただいておりますが、「関山」のパネルデスカッションで東北の山河が語られていました。命のゴール点がすぐ近くと思うとき、幼き日の遊びや野山、川など思い出し、童（わらべ）がへりとはよく申したものと自分でも感じます。

二、三年前、浜松の十三夜の観月俳句大会が臨済宗の奥山方広寺であり、有馬朗人先生ほか二、三の選に入り大会賞を頂きました。当日句で、草むらの苔も乾き、指も欠けた一体の羅漢様が目に入ったとき、自分の歳月が思われて

十三夜遠つ淡海の風化佛

この、間淵さんを知ったのは二十年ほど前のことであった。

奥州藤原氏、四代泰衡公の首級を納めた棺桶から発見された八十個ほどのハス種子が保存されていて、もしかして、大賀ハスのように発芽し開花しないものだろうかと、かつて大賀博士のもとにいた研究者に依頼して十年ほど、漸く朗報を得たころのことであった。

たまたま繰っていた俳誌「草笛」のなかに

逆縁の柩に母の種袋

という一句があった。「種袋」に釘付けになったのを覚えている。唐突ながら、作者の間淵うめ子さんに種袋の背景を手紙で伺った。

うめ子さんの生家は秋田県の、阿仁川の流れる旧落合村（北秋田市合川）であった。泰衡が討たれた比内（大館市）もそう遠くない。

そして後日いただいたハガキに、「この地方では、大事な人の柩には七種の種を入れて葬るのが古くからの例だったと、古老から聞いて。今も」と、書かれていた。

欣求浄土節分の雪夜を白く

（平成十年）

年輪の槙を伐りたる冬日向

（平成二十五年）

「関山」誌友、というわけである。

先に掲げた手紙は、便箋六枚に確りした文字でつづく。

この頃しきりに思うことは、遠祖はきっと夷（えみし）のたくましい人達であろうなどと、つれづれに思っては十七文字にしております。

来年の事は計りかねますので、長い間の御厚誼の感謝も兼ね雑文をつらねました。

本当に有難うございました。

二月十五日　かしこ

間淵うめ子拝

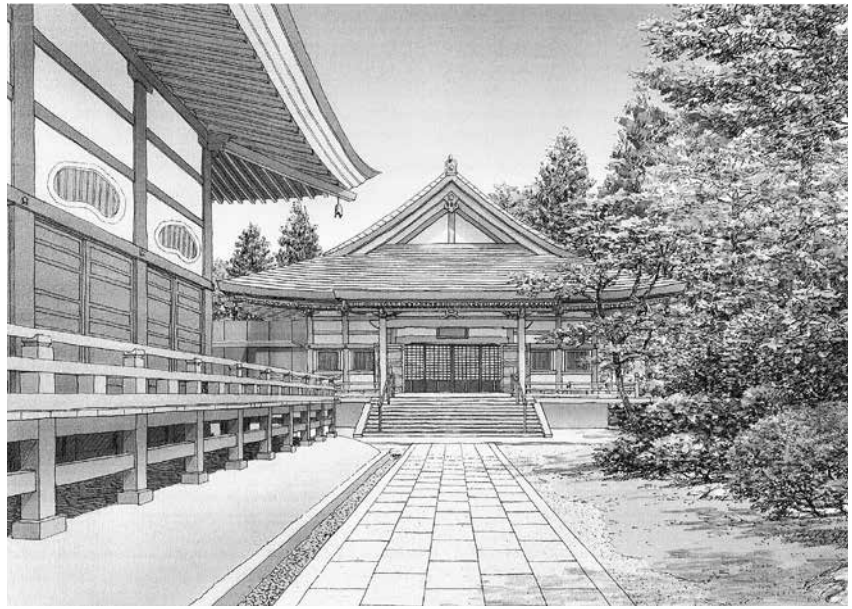
満九十四才　山姥

この手紙がまさに最後となった。去年、いただいた年賀状には、

数え日の杖なしでゆく足の神

中尊寺ハス

泰衡公の首桶



光勝院完成予想図

光勝院建設着工

菅野澄円

平成三十年五月八日、地鎮式を執り行い、光勝院建設はいよいよ本格着工いたしました。

中尊寺の諸行事に対応するための施設計画については、平成二十年からその準備検討を重ねていましたが、東日本大震災とその後の被災地復興を優先する考えから、一時作業を中断。再開後は、文化庁を始めとした諸機関との協議、地下遺構保全のための計画設計の変更にも時間を費やし、世界文化遺産の構成資産の一つとして、責任を果たしてまいりました。その結果、着工まで十年を要することとなったのです。

建設予定地である中尊寺本堂北側には、昭和三十七年から使用してきた宿院東稲荷、昭和四十八年竣工の大広間があり、藤原まつり、大施餓鬼会、大節分会、各種講演会など多くの行事で会場、控室として利用されてきました。但

し現代の基準からすると段差の多さ、空調設備の不足など、人に優しい建物とは言えず、それにもまして老朽化著しい状態でした。ところが平泉の世界文化遺産への登録機運の高まりとともに、中尊寺を会場とする様々な講演会、研修会、演奏会などのお申し出、教育旅行での坐禅・写経の体験希望校は非常に増えました。本堂で様々な行事が行われることは寺院としてあるべき姿であり喜ばしい事なのですが、その間一般参拝のお客様にはご不便をおかけすることもありますし、逆に厳粛さが求められる行事で、堂外からの観光地の賑やかな喧騒が聞こえてしまうこともおこります。単に老朽化した建造物の建て替えという単純な話ではなく、時代・世相の移り変わりにどう対応し、これからの中尊寺はどうあるべきかという大きな課題への回答が求められました。なかでも、ユニバーサルデザイン、バリアフリーを基準とした人に優しい建物という概念は必要不可欠な要件となりました。光勝院の床高は、本堂内回廊と同一としています。法要・行事中の人の移動に段差が無いように、さらには車椅子や体の不自由な方々が本堂へ出入りする容易さを考え、光勝院下階の出入り口からエレベータで光勝院上階の本堂レベルまで移動するよう設計されています。これまで本堂周辺に不足していたトイレについては、本堂と光勝院を繋ぐ渡り廊下突き当たりに設け、本堂、光勝院双方から利用できるようにしました。各室については空調により季節を問わず快適に諸行事が行える環境を目指しながら、省エネ対策をすすめています。

「光勝院」は当山の古院で、かつて坂下にあった閼伽堂の別当であり、関山の麓で地域の方々に最も近しい存在であったはずです。その「光勝院」の名前を新しい建物に冠しました。これまで、旧宿院・大広間の時代には、仏堂にあたる施設はありませんでしたが、今

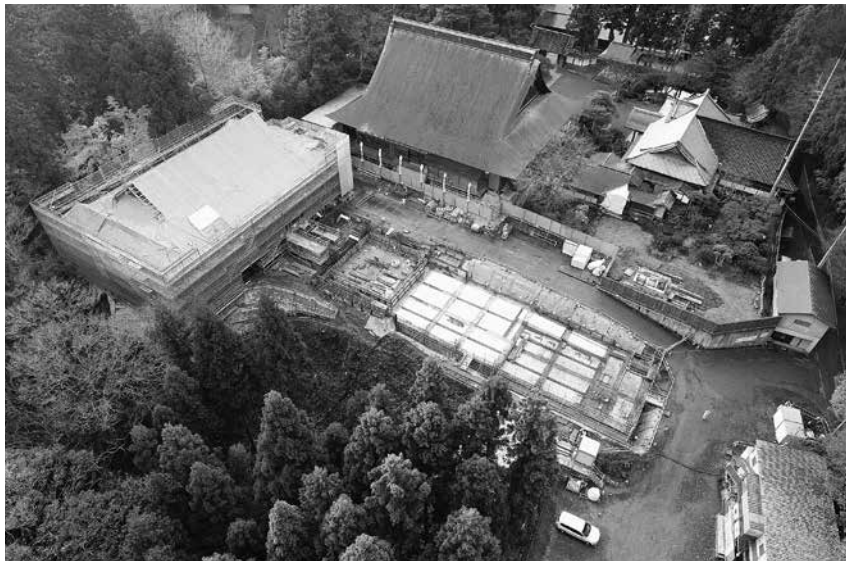
光勝院仏堂完成予想図

回の計画では約百二十畳の仏堂を建立し、本尊には本堂御本尊として長く親しまれてきた阿弥陀如来をお祀りいたします。さらには釈迦如来、薬師如来を造立し三尊を安置することとなります。これは中尊寺（釈迦如来）、毛越寺（薬師如来）、無量光院（阿弥陀如来）のそれぞれの御本尊であり、奥州藤原氏の平泉約百年の街作りの思想を受け継いでいます。御参拝の方々の様々な思い・願い・悩み・祈りにも「仏様が頭を撫でて下さる」諸佛摩頂（しょぶつまちょう）の場（にわ）を具現化した空間となって欲しいと願っています。

施工の株式会社大林組様には、各種の制約のある中、安全かつ順調に建設を進めて下さっていることに感謝いたします。木工事を担当する社寺工舎の職人の中には平泉の方が参加しています。これからも未来永劫続く歴史的建造物の護持という観点から、これ以上心強いことはありません。

工期は残り一年を切り、今後は細部にわたっての計画の調整が始まります。本年十月末には竣工・引渡しがあり、明年（二〇二〇）春に落慶供養法要が執り行われることとなっています。

（光勝院建設委員会事務局）



建設現場（平成30年11月）

訪日外国人観光客の受け入れについて

破石晋照

「一足早いクリスマスプレゼントだって言ってさ、香港のお土産とクリスマスカードが届いて、それで本当に泣けるほど嬉しくて、ただ、自分がもっと外国語とか話せれば、もっとお互いに理解し合えたと思うのに…」幼馴染の彼が私にそのことを話した時、私ははじめ彼の言葉とは信じられなかった。

彼は小学校と中学校の同級生で、学校から帰る方向も同じ、また不思議と趣味が似通ったところもあり、本当に仲良く子供時代を過ごしていた。二人の中での大きな考え方の不一致点というか、趣味の重ならない部分があるとすれば、いわゆる海外に対する目の向き方で、当時大学生だった私は、海外旅行の楽しさや外国語の習得と外国人とのコミュニケーションに非常に興味を持ち、いわゆる外国かぶれだった。その頃彼も仲間に引き込んでやろうと散々に誘ったのだが、彼は頑としてそれを受け入れず、全くもって私の勧めには乗ろうとはしなかった。

そんな彼も私と同じように平泉に戻り、そして一軒の宿の管理者となった。その頃私は訪日外国人観光客の誘客を担当し始めたばかりのころで、何もわからない中でも試行錯誤しながら毎日誘客のことばかり考えていたころである。当初私は、彼が町内の宿の管理を担当すると聞き、およそ学生の頃から興味がなかった外国人とのコミュニケーションを彼がこなすことができるのだろうかと少々心配していた。

彼に聞いたところによると、くだんの香港人とはマカオの大学で国際ツーリズムか何かを教えているという人で、学生に教えるために身をもって日本の観光地を体験に来たという。当初二泊を彼のところで過ごすつもりが、片言でも一生懸命外国語を話して、コミュニケーションをはかる彼の、その心からのホスピタリティに触れるうちに延泊が伸び、最終的には彼の所に五泊ほどして、そこを拠点に岩手県内の観光地を回っていたのだという。そしてそのお客様が帰国後、親切にされたお礼にと言ってプレゼントを

送ってきたのだそうだ。

この出来事を彼から聞いた時、私は感動を受けると同時に、それまで幼馴染であった彼を侮ってしまっていた自分を恥ずかしく思った。私はこと外国語に関しては自信があり、数カ国語を使って平泉を訪れる外国人とは不自由なくコミュニケーションをとっていた。もちろんお礼の電話やメールを受け取ることもあった。外国人とのコミュニケーションには外国語の習得が必要と思っていたし、人よりも話すことができるという自負もあった。しかし彼が、私から見てもおよそ外国語を操ることができないと思う彼が、精いっぱいコミュニケーションをとることによって、言葉の壁を乗り越え、一人の外国人を感動させたのだ。本当のコミュニケーションの能力というものについて考えさせられた一つの〝事件〟であった。

外国語ができるとか、人より海外での経験があるとかそう言ったことではない。本当のコミュニケーション能力、あるいは本当の受け入れ能力とは、一人のお客様に対して、拒絶や諦めを持たずに、一生懸命受け入れる姿勢を見せ、そして笑顔で見送ることがどうかにかかっているはず。それが本当のおもてなしの一つであるはずなのに、外国人と見るや距離を置こうとしたり、関わらないようにしようとする人がとても多い。かくいう私も、外国語を話して積極的に関わろうとしながらも、時々は心のどこかで、その場をやり過ごす気持ちがあったと思う。

外国人観光客の誘客を始めたころ、最終的な目標がどこにあるのか悩んでいた時期があった。もちろん総数を増やすことは一つの目標としてわかりやすいのだが、一人の僧侶として、また観光にたずさわる人間として、どんな目標を持つべきかということを考えたとき、やはりその最終的な目標はできるだけ多くの観光客との交流とそこから生まれる相互理解で、大それたことかもしれないが、それが最終的には世界の平和につながっていくはずだと思い、それを信じて目標にしてきた。せっかく日本まで観光に来て、異国を眺め通りすぎてゆくだけでも十分なのかもしれないが、たった一言でもそこで交流が生まれたとき、おそらく旅行者の旅の満足度は比べ物にならないくらいに高まるはずなのだ。彼はそれを身をもって証明し、また彼自身も一軒の宿の管理者としてかけがえのない経験と思い出を手に

入れたに違いない。

訪日外国人の数の増加とともに、日本全国の自治体や様々な観光地でその実数のカウントを始めている。しかし、数の把握に満足することなく、それと同時に、受け入れる側がお客様に対して満足を与えられているかどうかにも目を向けなければならない。政府の統計では訪日外国人観光客の人数は三〇〇〇万人に迫る勢いだという。我々には、三〇〇〇万人の海外の人々と交流し相互理解するチャンスが与えられたのだ。

（総務部次長）

紅葉シーズンの金色堂前広場には多くの訪日外国人観光客が訪れる

一枚の写真から〈1〉

北嶺澄照
（薬樹王院住職）

木瓦

昭和四十三年七月に『国宝中尊寺金色堂保存修理報告書』が刊行されました。写真は修理に伴い素屋根がかけられ、覆堂が解体された時に撮影されたものです。

金色堂は木瓦で葺かれているということは、多くの方がご存じだと思います。国宝指定書には「本瓦形板葺」と記載されています。

元奈良国立文化財研究所所長、鈴木嘉吉氏の「金色堂の建築」から一部引用し、ご紹介します。

屋根はかなり急勾配の宝形造りで丁寧に瓦型を刻んだ木瓦葺とする。一般には珍しいが厚板を流葺にしてその目地に半円形の瓦棒を伏せた形式は、奈良や京都の平安末から鎌倉時代の社寺建築の修理時に数多く発見されていて、今は瓦葺きや桧皮葺となっている建物が当初は木瓦葺だったことがわかる。醍醐寺五重塔（九五一年）も当初木瓦葺であった。瓦葺の重苦しさを嫌った京都の貴族がむしろ木瓦葺を愛用した記録もある。大工物部清国が京都の工匠であったことはその名前からも察せられ、金色堂は都にあっても典型かつ流行の建築なのである。

『国宝中尊寺展』所収
（佐川美術館発行）

物部清国は金色堂棟木墨書銘に記されている大工です。

＊

木瓦の用材は現在福島県を北限とし、関西を普通の産地とするコウヤマキ。丈夫で朽ちにくく、水に強い等の特性から、福島以南から取り寄せたものなのでしょう。

中尊寺讃衡蔵企画展

「国宝金色堂大修理の記録」展

開催報告

三浦章興

「昭和の大修理」といわれる金色堂保存修理は、建物全体を解体して行う全解体修理と言われるものでした。昭和三十七年に着工され、足かけ七年に及んだ大修理は昭和四十三年に竣功、昨年はその時から五十年という大きな節目の年でありました。

中尊寺では、私たち山内の僧侶が、金色堂について多方面から学び直すための勉強会を三回にわたって実施。四月には当時の関係者や専門家による記念シンポジウムを開くなど、あらためて金色堂と向き合う機会の多い一年となったのでした。

そのような中、宝物館讃衡蔵においては、平成三十年九月十五日から十一月十八日までを会期とし、「国宝金色堂大修理の記録」展を開催しました。

ご参拝のみなさまに、修理前の状況、大修理によってよみがえった金色堂のすばらしさ、工事に携わった方々の熱意などを伝えることができればと、修理にちなんだ資料及び工事に関する写真パネルなどを展示しました。

今回の展示内容からすると、専門的で難解になりやすい内容をいかにわかりやすく伝えるか、展示の目玉としては何が相応しいか、そもそもどういった手順で準備を進めるかなど、課題は多くありました。初めて企画展を担当したこともあり、戸惑うことも数々あったわけですが、先達の意見に耳を傾け、展示のあり方をあれこれ模索し、慌ただしい日々が続き、漸く開幕の日を迎えたのでした。

会期中は秋の観光シーズンでもあり、多くの方にご覧いただくことができました。

世界遺産平泉のシンボル「金色堂」に対する理解を深める一助となることができたのであれば幸いに存じます。

尚、記録として主な展示品の写真とリストを掲げ、参考に供することといたします。

金色堂内陣巻柱（復元模造）

直径　二七三ミリ　高さ　一二〇〇ミリ

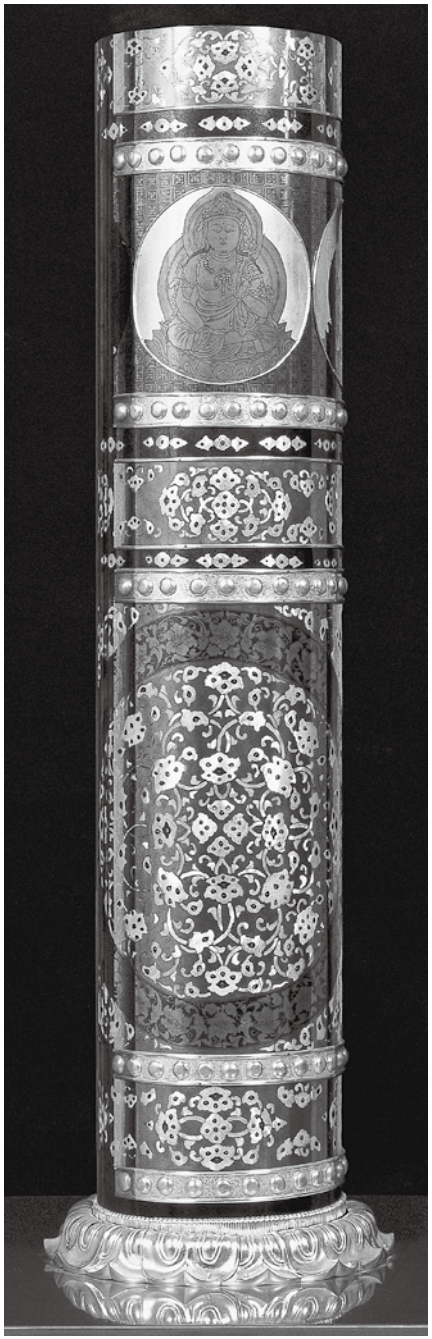
栃木　うるし博物館

金色堂中央須弥壇は、四本の巻柱に囲まれている。その内、艮（うしとら）（東北、正面向かって右）柱を平安時代と同じ技法で製作されたものである。

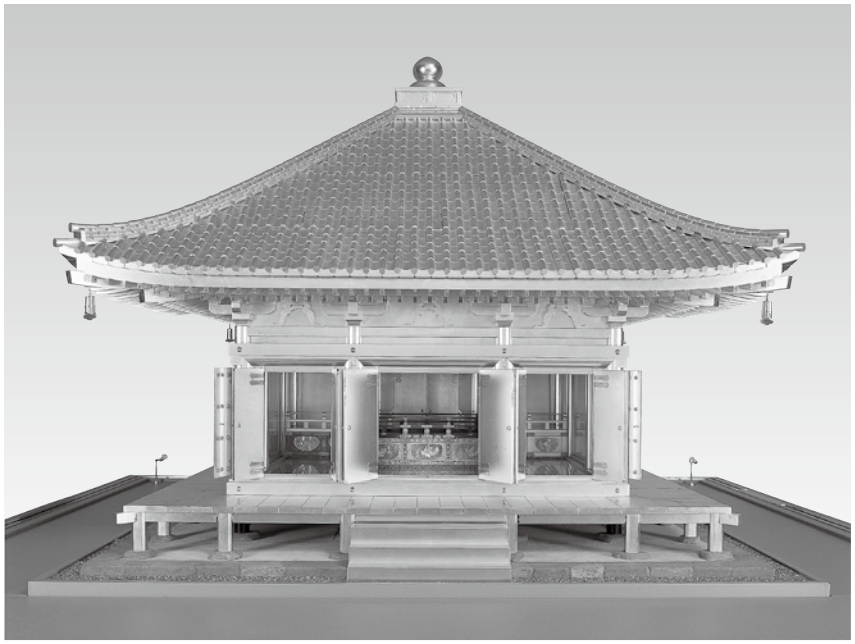
この復元模造は、栃木県日光市にある小西美術工藝社のうるし博物館に常時展示されているものであるが、今回特別に借り受けて展示させて頂いた。

五十年前の修理の様子を記録した映像を見ると、巻柱の修復には職人達による、非常に多くの手間と時間がかけられている様子がわかる。その修理を担ったのは小西美術工藝社であった。

この巻柱は、下地から蒔絵や鍍金など、時計回りに作業を進めて製作されたもので、仕上げまでの作業工程が良くわかるようになっている。



巻柱復元模造



金色堂復元模型

木造漆箔　縮尺五分の一

修理前の金色堂は、露盤や宝珠、廻縁などが失われた状態であった。修理に際しては、それらをどう復元するか、また蒔絵や螺鈿細工の補修程度を考究する必要もあり、実際の建物で取りかかる前に、縮尺五分の一の復元模型を製作して、修理の検討資料とした。

しかし、これは復元模型と言われてはいるが、木材は本工事の際に不用となった旧覆堂の厚床板を使用し、漆塗りから金箔押しまで実際の金色堂で行われる作業にできるだけ忠実に行い、内部の巻柱や須弥壇格狭間の意匠まで綿密に作られており、一般的にいわれる模型というより、小さなもう一つの金色堂といっても過言ではない仕上がりになっている。

金色堂の木瓦葺きの屋根は、修理の際に金箔の痕跡が発見できなかったために箔補填は見送られたが、この模型の屋根には箔が押され、金色燦然たる姿となっている。

なお、昭和の大修理の期間中に展示され、参拝者の施工内容理解の一助となったと言われている。

「中尊寺金色堂内陣正面全景」
「中尊寺金色堂覆堂東北面全景（旧状）」
土門拳　昭和三十六年撮影

写真家土門拳氏による、修理前の金色堂および覆堂を撮影した貴重な写真である。

土門氏は昭和三十年代に幾度か平泉を訪れ、中尊寺や毛越寺の諸堂諸仏を撮影された。写真集『古寺巡礼』にそのいくつかを見る事ができる。

企画展では、修理前の金色堂の姿を見ていただく必要があり、そのために最も適した写真は土門氏の撮影した金色堂に他ならず、酒田市にある土門拳記念館に今回の展示の趣旨を説明の上、写真の展示を依頼したところ、快く応じていただき、今回の写真パネル展示となった。

展示ブースに入って正面の所に、大きく二枚を展示していたため、他のパネルに比べ、足を止めて見入っている参拝者が多かったようである。

以下、その他展示品を紹介する。

ケース展示（常設展示されている品）

夜光貝
螺鈿断片
中央壇束の包金具
藁座（わらざ）金具
八双金具
瓔珞（ようらく）断片
金箔
金色堂巻柱荘厳復元図
蒔絵手板

パネル展示（写真）

修理前の金色堂中央壇正面長押
現在の金色堂中央壇正面長押
修理前の堂内の斗栱（ときょう）
修理前の巻柱（正面左方）
修理前の中央壇
修理前の須弥壇を全て取り払った堂内の様子
修理前の小屋組
修理前の屋根（木瓦の拡大写真）

（管財部執事）

八双金具（金色堂扉八双金具残欠）

「かんざん亭」自然の食感

かんざん亭一同

白山神社の赤い鳥居をくぐると、その先にかんざん亭があります。中に入ると、衣川ののどかな景色と、焼石岳をはじめとする奥羽山脈の山並みを望むことができます。その眺めは四季の移り変わりを色濃く感じさせます。店内には静かなジャズが流れ、ゆったりとした時間を過ごすことができます。

かんざん亭では、自然薯を使用したメニューを多数提供しております。ここで使用している自然薯は、地元・平泉自然薯の会で作っていただいています。自然薯は強いねばりが特徴で、滋養強壮・疲労回復に好いとされています。

かんざん亭の蕎麦には、この自然薯が練り込まれており、つゆによく絡み、ツルッとしたのどごしの好さがお客様からご好評をいただいています。

一番のおすすめは、「自然薯そば・小鉢付き」です。もっちりとした自然薯と、三陸産のめかぶを使用した小鉢は、温・冷をご用意しており、温かいものは自然薯と蕎麦がよく絡み、冷たい方は自然薯のおいしさが一層引き立ち、蕎麦本来の味もお楽しみいただけます。小鉢のめかぶを一緒に混ぜていただくのもおすすめです。

また、チーズと自然薯を混ぜ合わせたトッピングの「自然薯マルゲリータ」もございます。手作りのピザソースと二種類の濃厚なチーズを、自然薯がやわらかな味に仕上げています。

デザートには「自然薯入りティラミス」を、プレスコーヒーとともにどうぞ。クリームに自然薯を練り込み、もちもちとした食感が特徴です。

その他、季節に合わせた食材を使ったメニューも取り揃えています。

中尊寺にお越しの際は、ぜひ、かんざん亭にお立ち寄りください。スタッフ一同、心よりお待ちしております。

窓外眺望――奥州市衣川の月山（上段）。奥羽山脈の山並み（下段）。

関山植物誌〈9〉

破石晋照
（金剛院副住職）

連想クイズ「お寺に咲いている花といえば？」やはり、蓮や睡蓮だろうか、私の育った寺にも池があり、夏は蓮や睡蓮の花が所せましと咲いていた。

特に蓮は夏には欠かせない植物で、お盆になると池から採ってきた蓮の葉にご飯をのせてお供えする。水辺の動植物が大好きだった私は、お盆のころ、いよいよ祖父が池に蓮の葉を採りに行く時には喜んでついて行ったものだった。

最近、ビオトープを作るのが趣味の一つとなり、そこに蓮の花を咲かせようと思ったのだが、その草体はあまりに大きく、代用として草体の小さな睡蓮をビオトープに植え込んだ。睡蓮はすくすくと育ち、三枚程の葉っぱを並べた頃、ゲリラ豪雨に襲われた。参道の中尊寺蓮はその頑丈な茎で葉っぱを支え、必死に豪雨という困難に抵抗している。ビオトープの睡蓮は完全に水没していた。

雨が止み、中尊寺蓮は葉に白玉のような水滴を溜め、再び太陽に向かい葉を伸ばしている。そして睡蓮は、鉢の水を少しずつ抜くと何事もなかったように水面に葉を浮かべた。

なるほど、蓮はその強靭な草体で、大雨という困難に抵抗する。一方の睡蓮はそれとは対照的に、抵抗するのではなく、困難にすら身をまかせ一度水没し、水が引くのを待ち続ける。

この困難に立ち向かう姿を目の当たりにした私は、「最近の頑張り屋さんの子供達」に、たまには睡蓮のようになされるがままの生き方をしてもいいんだよという旨の法話をしようと思いついた。

法話のアンケートには、「それでもやっぱり、困難には全力で立ち向かっていきたい！そうしないと悔いが残る！」と、とても力強い文字で書いてあった。

睡蓮から閃いた渾身の法話のネタが、子供達にいともたやすく否定されるという困難。私は蓮のようにこの困難立ち向かい、再び法話のネタを探すのであった。

睡蓮

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

ご詠歌この一年

三浦 みゆき

金色堂大修理五十年を祝う年となった昨年は、例年の法要出仕に加え、関連行事への参加も幾つかありました。

六月十三日には、御詠歌と舞踊を取り入れた「四寺廻廊」の法要が行われました。御詠歌は、昨年の「東日本奉詠舞大会」で〝とても素晴らしかった！鳥肌が立った！〟と称賛をいただいた曲「慈覚大師讃仰和讃」一部・二部合唱です。大会から半年が過ぎておりましたので、またお稽古を重ねて臨みました。参列いただいた方々にどのように届いたでしょうか。一方、舞踊は「花和讃」という曲で、舞い手が両手に花を持って舞うものです。この日は若手のお二人が初めての舞台となりました。相当に緊張もあったでしょうが、先輩方のご指導のもと、見事に舞いきりました。

来年は長野県で「東日本奉詠舞大会」があります。舞踊の方々には大会に向けて頑張っていただきたいと思いますし、期待しています。御詠歌の方も、また〝素晴らしい！〟と言っていただけるように、会員の皆様とともにお稽古に励んでまいりたいと思います。

今年はもう一つ大きな行事、如意輪講式法要がありました。如意輪講式は、世界遺産登録五周年の去る平成二十八年に、八五〇年ぶりに復元されました。その時は全七段のうち主要な三段だけでしたが、今回は全七段をお唱えしました。九月三十日の本番に向け、積善院佐々木仁秀師を先生に、中尊寺・毛越寺両支部の会員約三十人が参加して、六月二十七日に初めてのお稽古がありました。先生からは「この音は舌音で！」などと、発音を細かく指導され、また「間違ってもいいから大きな声でお唱えしてください！」とも言われました。九月七日には念仏句頭をお願いしておりました、福聚教会名誉講師加藤玲子先生がお見えになり、お稽古を重ねました。長時間の法要でしたが、終了後に仁秀先生から「良かったですよ」と言っていただき、また控え室に戻るときには、参列した一般のお客様に「とても素晴らしい行事でしたね」と声を掛けられ、大変嬉しく思いました。中尊寺本堂に参集した大勢の皆様が一体となった

この法要の、感動・感激と言ったようなものが余韻として残っています。

十二月十日には、中尊寺光勝院の上棟式がありました。式のなかで遠野市の「社寺工舎」による古式の上棟式を見ることができました。大変に寒い中ではありましたが、会員の皆様には多数ご参加いただきまして、有難うございました。

また、六月に福島県で東日本研修会、十二月には陸奥地方本部主催による研修会が開催されました。詠唱・舞踊ともに沢山の会員の方々に参加していただきました。検定試験も無事全員合格という、実りのある研修会となりました。

今後とも当支部の活動に、ご支援・ご指導賜りますようお願い申し上げます。

（願成就院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事）

四寺廻廊法要（平成30年６月13日　中尊寺）

新刊紹介

（二〇一八年一月～十二月）

〈出　版〉

『中尊寺と平泉をめぐる』

小学館　編著：菅野　成寛　三・三十一

『寺と仏像手帳』

東京書籍　著：土門　拳　監修：藤森　武（写真）・堀内　伸二（文）　九・四

カラー百科　見る・知る・読む『能舞台の世界』

勉誠出版　編集：小林　保治・表　きよし　写真監修：石田　裕　三・三十

〈報告書〉

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集

骨寺村荘園遺跡確認調査報告書　平泉野遺跡』

一関市教育委員会　三・二十三

『平泉文化研究年報　第18号』

「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会　三・二十七

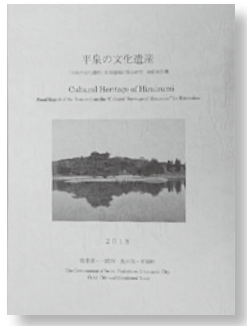
『岩手県文化財調査報告書第１５３集　平泉遺跡群発掘調査報告書
柳之御所遺跡　第78・79次発掘調査概報』
岩手県教育委員会生涯学習文化財課　三・二十九

『骨寺村荘園遺跡村落調査研究　総括報告書』
一関市博物館　三・三十

『平泉の文化遺産
「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究　総括報告書』
岩手県・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会　三・二十九

『岩手県平泉町文化財調査報告書第１３０集　平泉遺跡群発掘調査報告書
伽羅之御所跡第25次　毛越Ⅱ遺跡第６次　西光寺跡第11次　志羅山遺跡第１１３次
志羅山遺跡第１１４次　鈴懸の森遺跡第２次　中尊寺跡第86次　花立Ⅱ遺跡第25次
無量光院跡第35次　毛越寺跡第18次』
平泉教育委員会　三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第１２９集
特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅹⅳ　――第34次調査――』
平泉町教育委員会　三・三十一



〔関山句嚢〕

（平成三十年六月二十九日　於中尊寺）

〈第五十七回　平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

（當日句入選）

涼しさや螺鈿の風の光堂　（大会長賞）
＊片山由美子選　特選　気仙沼　熊谷　正子

万緑や山懐に十八坊　（中尊寺貫首賞）
（岩手県ユネスコ協会連盟会長賞）
特選　平　泉　岩渕　洋子

月見坂杉真直なる涼しさよ　（毛越寺貫主賞）
特選　奥　州　石井　文子

蛇崩れの山をかなたに青すすき
秀逸　盛　岡　安達　広子

緑陰の坂道ながく長くあり
秀逸　陸前高田　千葉　常子

夏の蝶奥の院まで行くつもり
秀逸　花　巻　髙橋　和枝

大蟻の上り下りや月見坂
秀逸　北　市　小笠原志保子

平泉の日空の上にも空のあり　（岩手県知事賞）
＊白濱一羊選　特選　宮　城　鈴木喜久郎

旅人の句碑に旅人沙羅の花　（河北新報社賞）
特選　平　泉　鈴木　信

蟻地獄精舎の下を逐はれたり　（岩手日報社賞）
特選　平　泉　菊池　幸介

罷り出る弁慶貌の蝦蟇
秀逸　大　崎　木村蛍雪子

僧道やどこ歩いても蟻の道
秀逸　花　巻　豊山れい子

鞘堂のがらんどうてふ涼しさよ
秀逸　盛　岡　兼平　玲子

涼風（すずかぜ）の声明となる平泉
秀逸　横　手　森屋　慶基

みほとけの慈眼に見ゆ青葉光　（岩手県議会議長賞）
＊小畑柚流選　特選　奥州　梅森　サタ

風薫る奥の浄土や光堂　（岩手日報社賞）
特選　奥州　石川　敬子

寄せ合ふて一鞠ごとの七変化　（中尊寺賞）
特選　盛岡　藤澤　啓子

古も今も青葉の月見坂
秀逸　奥州　小野寺洋一

走り根の摑む千年苔の花
秀逸　花巻　土川喜代子

金色の釈迦牟尼仏や堂涼し
秀逸　登米　藤野　尚之

御朱印所水打ってより客を待つ
秀逸　一関　稲玉　宇平

緑陰や秘仏のまねく月見坂
秀逸　奥州　及川　英子

青梅雨の闇撥ね返す光堂　（岩手日日新聞社賞）
＊渡辺誠一郎選　特選　平泉　旭　光

言の葉の浄土千年風薫る　（毛越寺賞）
特選　一関　石川　惠子

万緑を胎内にして毛越寺
秀逸　一関　千葉　百代

鐘楼の開かずの門や苔の花
秀逸　一関　佐藤　冬扇

みちのくの山河の端や楸邨忌
秀逸　奥州　石井　文子

争はぬ久遠の韻や苔の花　（平泉町議会議長賞）
＊照井　翠選　特選　平泉　鈴木　四郎

螢火の一閃はしる能舞台　（岩手日報社賞）
特選　平泉　旭　光

枝蛙ほっほっ孵る弥陀の池　（岩手日日新聞社賞）
特選　大崎　木村蛍雪子

青楓錆びし卵塊そのままに
秀逸　平泉　岩渕眞理子

空濠の走り根抱く竹若葉
秀逸　平泉　岩渕　洋子

夏蝶を離さぬ下午の磨崖佛
秀逸　一関　小野寺東子

清衡の枕に凹み木下闇　（河北新報社賞）
＊橋本韶子選　特選　盛岡　山火　律子

青葉闇光堂まで掃き均す　（岩手日日新聞社賞）
特選　花巻　関　園子

紫陽花や若き悩みを聞きおりぬ
秀逸　平泉　三浦　英子

蕗採りの媼は句碑に一礼す
秀逸　一関　桂田　一穂

平泉の日根をおろしたる楸邨碑
秀逸　大崎　門間としゑ

梅雨晴や優しき兄になりたくて
秀逸　横手　伊藤　導水

般若経和して関山滴れり
佳作　西和賀　門屋　允子

（応募句入選）　（投句総数　八七五句）

せせらぎの音に力や鼓草
＊片山由美子選（天）奥州　古山　和子

木々の間のひかり流るる水芭蕉
（地）花巻　高橋　和枝

満開の桜の上に天守閣
（人）登米　藤野　尚之

北上川の大きく曲がる鯉幟
秀逸　花巻　高橋　和枝

余震なほゼリーに眠るさくらんぼ
＊白濱一羊選（天）塩釜　及川　源作

木苺を摘んで少女になる途中
（地）多賀城　櫻井アエコ

光るもの机上に揃へ入学す
（人）花巻　菅原砂登子

逃水や嵩上げ下の眠る街
秀逸　陸前高田　千葉　常子

走り根を座席代りに薪能
＊小畑柚流選（天）登　米　藤野　尚之

舞ふ蝶は静の魂か義経堂
（地）秋　田　岩屋　塵外（じんがい）

風鈴に南部の風の音拾ふ
（人）北秋田　坂　一草

堂跡や礎石まろみて草青む
秀逸　奥　州　大石　文雄

新緑の風すべり出す能舞台
＊渡辺誠一郎選（天）奥　州　梅森　サタ

つちふるや背を波たたせ雄牛くる
（地）北　上　下田　榮一

六十五トンの句碑抱く蜥蜴かな
（人）平　泉　鈴木　信

東稲山の雲の帯とく青田風
秀逸　仙　台　小野寺みち子

霾るや浄土に果つる絹の道
＊照井　翠選（天）大　崎　佐々木克狼駄（かつろうだ）

花の雨西行はいま中尊寺
（地）大　仙　鈴木　仁（ひとし）

落日のしばらく燃ゆる昭和の日
秀逸　北　上　小原　生子（せいこ）

秀衡が跡を耕し十八代
＊橋本韶子選（地）平　泉　岩渕　洋子

春風に万物胸を開きけり
（人）気仙沼　昆野　克惠

御仏の中に御仏涅槃雪
秀逸　岡　山　森　哲州

（入選句の重複は省き、秀逸・佳作の中から編者が適宜掲出した）

児童生徒の部

岩手県内　小学校の部　特選（三句）

平泉平和を願うはすのはな
一関市東山小学校　四年　永澤　りの

やっと出た空見る喜びふきのとう
花巻市太田小学校　五年　阿部　柊士

しょうぶ湯につかりて父と流しっこ
花巻市桜台小学校　五年　齋藤　匠海

岩手県内　中学校の部　特選（三句）

我先に涼風かきわけ月見坂
北上市江釣子中学校　三年　長谷川凪爽

五月晴れ木洩れ日まぶし中尊寺
奥州市江刺南中学校　二年　小澤　晃

青田道ひざの高さをいつか越え
県立一関一高附属中学校　二年　鈴木　悠太

平泉小学校　特選（三句）

ふく風は清明の歌耳すます
六年　小野寺愛莉

希望の道蛍が照らすやみの中
六年　小野寺幸輝

春の風家族のように温かい
四年　大森　空音

長島小学校　特選（三句）

ハウスから大地に根づく青いなえ
五年　千葉　博也

大空がうつるたんぼに苗そだつ
六年　岩渕　咲姫

仲良しなふたごのブランコさくらんぼ
六年　熊谷　萌果

平泉中学校　特選（三句）

父ちゃんと夕日を見ながら冷や奴　二年　橋階　一太

薫風や髪なびかせる帰り道　二年　髙橋　悠菜

田植え時丸い背中を横に見て　二年　佐々木碧紘

みちのくの風の身にしむ衣川　『寒雷』七月号　朱雀　栄子

蝦夷らも駆けし街道山桜　「河北俳壇」5/20　郡司　満

中尊寺冬の紅葉の中にをり　『草笛』二月号　小野寺東子

東稲山の風の狼藉枯蓮田　『草笛』二月号　岩渕　洋子

草若葉風ものがたる能舞台　『草笛』六月号　木村　利子

稲刈りの黄金の中に平泉　『草笛』十二月号　太田　土男

水澄んで廂せり出す毛越寺　『草笛』十二月号　鈴木道紫葉

一山の老僧雛僧御慶のぶ　「たばしね」一月号　佐々木邦世

托鉢の僧の歩みや氷面鏡　「たばしね」二月号　菊池　幸介

如月や朱印の色のやや淡く　「たばしね」三月号　岩渕眞理子

襟元を少し緩めて春を入れ　「たばしね」四月号　鈴木　四郎

西行を今に東稲山花衣　「たばしね」四月号　佐々木邦世

薬師堂オンコロコロと夏蛙　「たばしね」七月号　岩渕眞理子

梅雨晴れのみちのく山河風わたる　「たばしね」七月号　関宮　治良

姫待てふ滝の口碑や悪路王　「たばしね」八月号　北嶺　澄照

遣水に彩となりたる冬紅葉　「たばしね」十一月号　岩渕　洋子

日だまりの石にだかれし冬菫　「たばしね」十二月号　阿部　義美

平泉　中尊寺

降る雪の手の淋しさに鈴買へり　『心月』（平成28年）　秋篠　光広

〔関山歌籠〕

（平成三十年四月二十九日）

〈第三十九回西行祭短歌大会〉

＊桑原　正紀選

チエンソーアート際やか僧の持つ念珠の房の風も刻みて
（中尊寺貫首賞）
奥　州　岩渕　正力

仏にも鬼にもなれず生成のちさきニ本の角をあたたむ
（平泉町長賞）
東京都　浅田みどり

終活展衣身につけ経をよむロボットペッパーに人のあつまる
（平泉観光協会長賞）
千葉県　芳川　照代

千本の御手のニ本を胸の辺に合はす菩薩もさいごは祈り
（岩手日報社賞）
京都府　木畑　紀子

千手観音菩薩像（中尊寺観音院蔵）

父の墓雪積みてゐんをりをりに写真と語り母は春待つ
（ＩＢＣ岩手放送賞）
盛　岡　赤澤　篤司

太郎眠らせ次郎眠らせ千年の奥六郡に雪降りしきる
（岩手日日新聞社賞）
花　巻　三浦　公朗

佳作

影を引き白鳥の群れ帰りゆく間近となりぬわが退職の日は
奥　州　小野寺正美

丘の上の林檎畑に音ひびき枝打つひとりラジオ聞くらし
北　上　伊藤　淑子

寂々と花風に舞ふ五合庵霞の先に佐渡の山並
新潟県　柳村　光寛

風花の舞ひし一日の暮れ落ちて雲間に金のまろき月いづ
広島県　福庭加恵子

両親に虐待されて死んだ子は入園まじかのきらきらネーム
茨城県　栗崎　やえ

「見いつけた」言ひつつ開けよか春の夜の座敷童子の居そうな納戸
一　関　松村　雅子

逢うたびに「一緒に帰る」という妻よ許してたもれひそかにさけぶ
北　上　佐藤　義男

「和顔施」を教へてくれしと懐しむ亡母の教へ子はわが同級生
宮城県　野口　良子

御神事能番組

平成三十年五月四日

法楽
古実式三番

開口　佐々木五大　大皷　三浦　章興
千葉　快俊　小鼓　佐々木亮王
祝詞　菅野　澄円　笛　清水　秀法
若女　破石　晋照　後見　菅原　光聴
老女

後シテツレ　佐々木五大
前シテツレ　佐々木亮王

能
竹生島　シテ　北嶺　澄照　太鼓　三浦　章興
ワキ　菅野　成寛　大皷　千葉　快俊
ツレ　佐々木宥司　小鼓　佐々木仁秀
笛　清水　広元
間　破石　晋照

五月五日

開口　佐々木五大　笛　清水　秀法
後見　菅原　光聴

狂言
清水　太郎冠者　破石　晋照
主　破石　澄元

半能
田村　シテ　佐々木五大　大皷　千葉　快俊
ワキ　佐々木秀厚　小鼓　菅原　光聴
笛　清水　秀法

秋の藤原まつり　中尊寺能　十一月三日

連吟　平泉　二葉きらり園　園児四十一名
鞍馬天狗
老松
仕舞　一関喜桜会
雲雀山　八重樫結花
素謡　一関喜桜会
小督

半能
秀衡　義経　佐々木亮王
シテ　佐々木五大　太鼓　三浦　章興
ワキ　佐々木秀厚　大皷　千葉　快俊
ツレ　菅野　成寛　小鼓　菅原　光聴
佐々木宥司　笛　清水　秀法

能「竹生島」（平成30年５月４日）

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部　中尊寺関係

平成二十九年十二月一日～平成三十年十一月三十日

□ **平成三十年**

三月二十五日　於毛越寺
陸奥教区布教師養成所研修会　山内より九名参加
七月二十四～二十五日　於延暦寺
総本山駐在布教　瑠璃光院　菅野　康純
九月九日　於毛越寺
二部檀信徒会一隅大会　檀徒五名参加
集まった浄財九五、三〇〇円は地球救援募金へ
十月十四日～十七日　於延暦寺
台密十三流講伝　眞珠院　菅野　澄順
十月二十一日　於仙台迎賓館斎苑
一隅を照らす運動五十周年記念仙台大会並びに天台宗一斉托鉢
第一部　東日本大震災物故者慰霊並びに復興祈願法要
第二部　講演「日常生活と仏道修行」
講師　北嶺大行満大阿闍梨
延暦寺一山長壽院住職　藤波源信師

第三部　清興　津軽三味線　奏者　渋谷幸平氏
山内より僧侶八名、寺族・檀信徒二十六名参加
一隅大会・一斉托鉢において集まった
浄財一、三八三、九六二円は地球救援募金へ

□ **役職任免**

（平成三十年四月一日）
陸奥教区布教師会副会長　瑠璃光院　菅野　康純
天台宗総合研究センター研究員　眞珠院副住職　菅野　澄円
（平成三十年七月一日）
天台宗人権啓発委員会委員　法泉院　三浦　章興
（平成三十年十一月一日）
天台宗人権啓発委員会企画委員　法泉院　三浦　章興
（平成三十年十一月二十一日）
特定布教（ハワイ別院開創四十五周年記念法要）　中尊寺　山田　俊和

□ **住職任命**

（平成二十九年十二月十一日）
願成就院兼務住職　金剛院　破石　澄元
（平成三十年一月二十四日）
東福寺兼務住職　薬樹王院　北嶺　澄照
（平成三十年十一月二十七日）
金色院兼務住職　中尊寺　山田　俊和

□ **褒賞**

（平成三十年十月二十五日）
一宗公職歴任表彰　円教院　千葉　快俊

□ **教師補任**

（平成二十九年十二月七日）
僧都　観音院法嗣　清水　秀法
（平成三十年四月二十一日）
大律師　金剛院副住職　破石　晋照
僧都　圓乗院副住職　佐々木五大
権僧正　利生院　菅野　宏紹
（平成三十年九月十三日）
権律師　地蔵院法嗣　佐々木圓了

□ **経歴法階履修**

（平成三十年六月四日）

長講会唄匿勤仕畢　中尊寺　山田　俊和

□ **経歴行階履修**

（平成三十年八月一日～九月五日）

四度加行履修　地蔵院法嗣　佐々木圓了

（平成三十年十月三日）

入壇灌頂履修　地蔵院法嗣　佐々木圓了

□ **得度履修**

（平成三十年十月十三日）

大長寿院法嗣　菅原　光哉

□ **逝去**

（平成三十年二月二十三日）

瑠璃光院寺庭婦人　菅野豊子（五十六歳）

一隅を照らす運動五十周年記念仙台大会（平成30年10月21日）

執務日誌抄

平成二十九年十二月一日～三十年十一月三十日

平成二十九年

◇十二月

一　日　月次（つきなみ）大般若（本堂）
讃衡蔵運営委員会

三　日　延暦寺一山中山玄晋大僧正葬儀（貫首参列　於生源寺）

五　日　平泉町観光審議会（執事長　於役場）

七　日　薬師会（讃衡蔵）

秋期定例一山会議

九　日　中国旅行社訪問（～十二日、総務晋照　於上海）
シンポジウム「平泉研究の最前線―資料学からのアプローチ」（～十日、貫首、管財章興　於武蔵坊）

十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）

十二日　平泉町観光振興計画策定委員会（総務澄円　於役場）
初詣警備会議（管財五大　於泉橋庵）

十三日　中尊寺節分講中総会（執事長・法務　於泉橋庵）

十四日　叡楽心院天台座主探題大僧正孝淳大和尚三回忌法要・偲ぶ会（貫首　於比叡山延暦寺阿弥陀堂・京都ホテルオークラ）
弥陀会（讃衡蔵）

十五日　光勝院建設委員会

十六日　世界遺産キャンドル・平泉ぶとまん奉納（本堂）
骨寺村荘園米奉納
お経を読む会（地蔵ノ秀厚）
白山会（本堂）

十九日　観光庁観光地域振興課早川氏ほか来山（総務秀法案内　讃衡蔵）
一関・平泉地域ＤＭＯ設立検討委員会及びワーキング部会への報告会（執事長　於なのはなプラザ）

二十四日　文殊会（経蔵）
平泉観光協会臨時理事会（執事長）

二十八日　恒例御供餅つき

三十一日　午後三時　**一山総礼**

平成三十年

◇一月

一　日　○時　**新年祈祷護摩供修行**
七時半　東山町〈若水送り〉着
九時半　正月祈祷護摩（本堂）
十時半　総礼
修正会　釈迦供（本堂）
冬堂籠り（～五日、結衆、開山堂）
九時半　正月祈祷護摩（本堂）

二　日

修正会　薬師供（峯薬師　讃衡蔵）
午後三時　謡初め（庫裡広間）
三　日　九時半　正月祈祷護摩（本堂）
修正会　山王供（山王堂）
十一時　元三会　慈恵供（本堂）
四　日　修正会　熊野供（瑠璃光院薬師堂）
五　日　修正会　文殊供（経蔵）
大般若会（利生院弁財天堂）
六　日　修正会　釈迦供・月山法楽（釈迦堂）
寒修行（行者三名、町内托鉢。寒の入～節分）
七　日　修正会　白山十一面供（本堂）
大般若会（本堂）
修正会　弥陀供（金色堂）
八　日　修正会　薬師供（讃衡蔵）
一字金輪仏・千手観音法楽
修正会結願
午後一時半　恒例**「金盃披き」**
十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）
十四日　**慈覚会**（御影供　本堂）
お経を読む会（貫首）
十五日　窪寺茂氏来山（管財）
十九日　勝部民男氏黄綬褒章受章を祝う会（管財章興　於盛岡グランドホテル）
二十四日　富岡八幡宮宮司　富岡長子刀自命　葬場祭（貫首参列、随行晋照）
二十五日　光勝院建設委員会
二十七日　前毛越寺貫主南洞頼教師一周忌法要（参与秀圓　於毛越寺）
「世界遺産・平泉」スピーチコンテスト（執事長　於ホテルサンルート一関）
二十八日　**文化財防火訓練**
二十九日　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）
三十日　気仙沼市本吉冠者「高衡会」総会（執事長　於気仙沼市）
平泉観光協会理事会（執事長）
貫首　中国大使館訪問
三十一日　一隅を照らす運動理事会（貫首　於天台宗務庁）

◇二月

一　日　月次大般若（本堂）
三　日　節分会（日数心経　本堂）
恒例**大節分会**（関取北勝富士関招く。歳男歳女九十七名、町内園児が豆を撒く）

四　日　光勝院建築用木材見分（～六日、澄円　於台湾）
故松岡昭治氏四十九日法要（貫首・参与秀圓・光中　於毛越寺）

世界遺産講演会（管財章興　於平泉文化遺産センター）
朝赤龍引退　錦島襲名披露（法務宏紹　於国技館）
六　日　平泉商工会三部会合同新春講演会（管財章興　於道の駅平泉）
七　日　名古屋市観光文化交流局長渡邊正則氏ほか来山（執事長案内）
八　日　光勝院建設委員会
平泉岩銀友の会新春講演会（総務秀法　於武蔵坊）
十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）
十三日　東稲山さくらの会幹事会（管財章興　於保健センター）
十四日　前妙法院門跡菅原信海大僧正密葬（貫首　於輪王寺紫雲閣）
一関・平泉ＤＭＯセミナー（総務澄円　於武蔵坊）
涅槃会御逮夜（本堂）
十五日　**涅槃会**（涅槃講式　本堂）
お経を読む会（薬樹王院）
十八日　貫首　講演（妙法院文化講座）
二十日　立正佼成会盛岡教会様・花巻教会様来山（貫首）
二十一日　秋田県大館市・横手市・美里町様来山（貫首挨拶）
二十二日　前貫首多田厚隆大僧正追善法要（導師貫首、一山総出　本堂）
平泉町上下水道事業運営協議会（管財五大　於役場）
金色堂大修理五十年勉強会（講師　大正大名誉教授多田孝文氏・同大教授加島勝氏　庫裡広間）
二十三日　平泉観光協会理事会（執事長）
山内瑠璃光院菅野豊子様逝去
二十七日　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）
平泉観光協会通常総会（執事長　於平泉商工会館）

◇三月

一　日　月次大般若（本堂）
五　日　ＪＲ東日本盛岡支社・ＮＨＫ盛岡放送局訪問（執事長・総務澄円）
七　日　小岩金網株式会社創業五十周年記念祝賀会（貫首　於浅草ビューホテル）
八　日　立正佼成会創立八十周年記念祝賀会（貫首、総務澄円　於ホテルオークラ東京）
九　日　光勝院建設委員会
十一日　東日本大震災慰霊法要（貫首・大長寿院・円乗院・金剛院、澄円・亮王　於陸前高田市小友地蔵尊）
追善回向　祥月命日法要（本堂）
東日本大震災発生時刻　打鐘・黙祷
十二日　市原市宝林寺様団参
十四日　平泉町観光振興計画策定委員会（総務晋照　於役場）
十五日　中尊寺菊まつり協賛会役員会（庫裡広間）
十六日　平泉古事の森育成協議会（管財五大　於役場）

平泉町文化財調査委員会議（澄円　於平泉文化遺産センター）

十八日　世界遺産平泉シンポジウム関係者来山（法務宏紹案内）

十九日　**基衡公御月忌**（胎曼供　本堂）

お経を読む会（利生院）

平泉町世界遺産推進基金運営委員会（執事長　於平泉文化遺産センター）

二十日　㈱大林組東北支店訪問（光勝院建設委員会委員長広元・澄円）

二十一日　春彼岸会法要（法華三昧　本堂）

光勝院建設委員会

春期定例一山会議

二十三日　平泉観光協会理事会（執事長）

二十四日　開山会（護摩供　開山堂）

源義経公東下り行列保存会定期総会（総務澄円　於滝沢魚店）

二十七日　浄土宗神奈川教区青年会港南組様団参（法務宏紹案内）

前妙法院門跡菅原信海大僧正本葬

（貫首、随行亮王　於妙法院宸殿）

美女旅×いわて活動報告会（総務秀法　文化遺産センター）

二十八日　貫首　エジプト大使館訪問

二十九日　平泉町観光審議会（執事長　於役場）

平泉文化観光振興基金運営委員会（執事長　於役場）

職員研修（「参道沿いの諸堂と石碑について」　講師　薬樹王院）

三十日　讃衡蔵運営委員会

金色堂大修理五十年勉強会（講師　文化財虫菌害研究所理事長　三浦定俊氏　庫裡広間）

◇四月

一　日　月次大般若（本堂）

光勝院建設委員会

一関・平泉地域連携ＤＭＯ発足セレモニー（執事長　於なのはなプラザ）

三　日　㈱大林組東北支社長来山（光勝院建設委員長広元・執事長）

四　日　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）

五　日　東下り行列主要役者記者発表（法務宏紹　於役場）

六　日　天台宗陸奥教区布教師会総会（貫首　於毛越寺）

七　日　天台陸奥教区仏教青年会総会（執事長　於毛越寺）

八　日　仏生会（本堂）

お経を読む会（観音院）

十　日　東稲山さくらの会総会（管財五大　於役場）

十一日　平泉をきれいにする会総会（管財五大　於役場）

東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）

十四日　熊本地震物故者三回忌追善法要（本堂）

平泉町消防団第五分団屯所新築移転披露祝賀会（執事長・管財章興　於平泉レストハウス）

十五日　恒例花まつり子供大会

十八日　春の藤原まつり交通警備会議（管財五大　於芭蕉館）

十九日　ＮＨＫ盛岡放送局訪問（執事長・管財章興）

弁慶力餅競技保存会総会（参拝秀厚　於芭蕉館）

二十一日　天台宗陸奥教区寺庭婦人会総会（執事長　本堂）

西行桜の森まつり植樹会（管財章興）

檀徒総代・世話人会総会（執事長・法務ほか　於武蔵坊）

二十六日　桜友会清掃奉仕（北参道）

二十七日　平泉商工会青年部通常総会（法務宏紹　於武蔵坊）

二十九日　西行法師追善法要（本堂）

第三十九回**西行祭短歌大会**（講師　桑原正紀氏「桜の歌の系譜」）

三十日　**金色堂大修理五十年記念シンポジウム「浄土の荘厳とみちのくの山河」**（本堂）

〈講演記録　本誌掲載〉

◇五月

一　日　**春の藤原まつり**開幕

金色堂大修理五十年記念

藤原四代公追善法要（本堂）

稚児行列

郷土芸能奉演（一関　行山流舞川鹿子躍）

二　日　開山護摩供（開山堂）

酒田三十六人衆田中勝己氏来山（総務）

郷土芸能奉演（江刺　行山流角懸鹿躍／栗原　栗原神楽）

春の藤原まつり「源義経公東下り行列」歓迎レセプション（貫首・執事長　於武蔵坊）

三　日　源義経公東下り行列（義経公役　俳優磯村勇斗）

郷土芸能奉演（衣川　川西念佛剣舞）

四　日　古実式三番

能　「竹生島」

郷土芸能奉演（胆沢　行山流都鳥鹿踊／胆沢　朴ノ木沢念仏剣舞）

五　日　古実式三番「開口」

狂言「清水」

半能「田村」

郷土芸能奉演（平泉　達谷窟毘沙門神楽）

六　日　山王講（山王堂）

八　日　**光勝院地鎮式**

十　日　豊山派清水宥聖師来山（円乗院）

十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）

十三日　「山菜を味わう会」（貫首・参与光中・仏文所長邦世　於羽山ふれあいセンター）

十四日　中尊寺菊まつり協賛会総会（本堂上段の間）

四寺廻廊総会（執事長・総務・法務　於電通東日本仙台支社）

ウェーサカ仏教会総会（法務亮王　於一関松竹）

十五日　天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）

十七日　JA県産米「金色の風」田植え安全祈願・豊作祈願法要（本堂）

十九日　第二十一回仙台青葉能「弓八幡」狂言「二人袴」「隅田川」協力中尊寺（貫首、随行宏紹　於仙台電力ホール）

二十日　淡交会岩手南支部様茶会（茶室・本堂・庫裡広間）

お経を読む会（大徳ノ宥司）

二十三日　平泉商工会通常総会（執事長　於商工会館）

金色堂調査（漆芸家・日本工芸会副理事長室瀬和美氏　管財）

二十四日　日中友好宗教者懇話会総会（貫首　於東京）

平泉観光推進実行委員会総会（執事長　於役場）

二十五日　光勝院建設委員会

貫首　講演（秋田経済同友会　於秋田市）

二十七日　曲水の宴（貫首、宏紹　於毛越寺）

貫首　法話（仙台ユネスコ協会様本堂）

二十九日　前日光輪王寺門跡菅原榮光大僧正本葬（貫首、随行秀法　於輪王寺）

三十一日　貫首、岩手県知事達増拓也氏と懇談（於盛岡市）

◇六月

一　日　月次大般若（本堂）

四　日　**伝教会**（御影供　本堂）

比叡山　長講会（貫首、随行晋照）

平泉芭蕉祭全国俳句大会実行委員会（執事長　於役場）

七　日　**「国宝中尊寺金色堂保存環境調査専門委員会」発足**

第一回委員会開催（庫裡広間）

委員金色堂を視察（～八日）

十　日　**法華経　一日頓写経会**（本堂）

十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）

十二日　貫首　講演（岩手県法人会連合会様　於Hメトロポリタン盛岡）

十三日　四寺廻廊法要（貫首　瑞巌寺・毛越寺・立石寺　本堂）

十四日　八時四十三分　岩手・宮城内陸地震物故者慰霊

打鐘・黙祷（発生より十年）

十五日　伊勢ノ海部屋一行来山（法務宏紹案内）

貫首　講話（NEXCO東日本様　於東京霞ヶ関）

十六日　ITE香港国際旅游展（十四～十七日、総務晋照　於香港）

第二十六回ふるさとひらいずみ会総会（執事長　於浅草ビューホテル）

貫首　講演（於一関市東山町）

十九日　金色堂温湿度調査（東京文化財研究所犬塚将英氏　管財）

一関警察官友の会総会（執事長　於ベリーノホテル）

二十日　自在房蓮光忌法要（本堂）

二十二日　光勝院建設委員会

第六十八回社会を明るくする運動平泉町推進委員会（執事長　於役場）

天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）

二十三日　福島教区光明寺様団参

二十四日　瑞巌寺本堂落慶法要（貫首、随行秀法　於瑞巌寺）

二十五日　貫首　中国天津訪問（～二十九日、日中友好宗教者懇話会）

二十六日　平泉町世界遺産推進協議会総会（執事長　文化遺産センター）

二十八日　平泉観光協会理事会（執事長）

二十九日　ウェーサカ式典（法務亮王、総代・世話人　於一関瑞昌寺）

第五十七回**平泉芭蕉祭全国俳句大会**（本堂・かんざん亭）

講師・特別選者　片山由美子氏

〈講演記録　本誌掲載〉

平泉世界遺産の日平和の祈り（執事長他　於旧観自在王院庭園）

◇七月

一　日　月次大般若（本堂）

五　日　天台宗海外伝道事業団総会（貫首　於宗務庁）

八　日　源義経公東下り行列保存会研修旅行（～九日、法務宏紹　於福島・会津方面）

お経を読む会（常住ノ亮王）

十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）

オーストリア大使フーベルト・ハイツス氏来山（貫首挨拶）

ウィーン・フィル奉納コンサート（能舞台）

十四日　平泉水かけ神輿宵宮（貫首ほか　於旧観自在王院庭園）

富岡八幡宮神輿総代連合会との交流会（貫首・執事長ほか　於武蔵坊）

十五日　**平泉総社神輿渡御**

十七日　**清衡公御月忌**（胎曼供　本堂）
二十一日　貫首　講話
（「青空説法」　於和賀多聞院伊澤家）
平泉総社神輿会「神酒開き」
（貫首　於泉橋庵）
二十二日　夏休み早朝坐禅会（本堂）
二十三日　秀衡街道行脚（～二十四日、貫首・毛越寺貫主、章興）
二十七日　桜友会清掃奉仕（開山堂）
平泉大文字送り火警備会議
（管財章興　於芭蕉館）
二十八日　中尊寺寺子屋（境内の自然観察会　講師　阿部慶元氏　境内）
二十九日　夏休み早朝坐禅会（本堂）
中尊寺寺子屋（みんなで作るお茶の会　講師　八重樫貞子氏　庫裡広間）

◇八月

一　日　月次大般若（本堂）
金色堂温湿度調査（東京文化財研究所犬塚将英氏　管財）
四　日　中尊寺寺子屋（槍かんながけ体験講師　山田雪氏　かんざん亭）
インドネシア特命全権大使アリフィン・タスリフ氏来山（貫首挨拶）
天台宗世界平和祈願法要・比叡山宗教サミット三十一周年「世界平和の祈りの集い」
（総務澄円　於延暦寺）
午後三時半**（平和の鐘）**打鐘
五　日　夏休み早朝坐禅会（本堂）
中尊寺寺子屋（境内の自然観察会　講師　阿部慶元氏　境内）
七　日　夏堂籠り（～十一日、結衆、開山堂）
十一日　東日本大震災物故者追善回向月命日並びに西日本豪雨物故者回向法要（本堂）
中尊寺寺子屋（みんなで作るお茶の会　講師　八重樫貞子氏　庫裡広間）
十二日　中尊寺寺子屋（槍かんながけ体験講師　山田雪氏　かんざん亭）
十四日　第四十一回**中尊寺薪能**
狂言「水掛聟」
能　「船弁慶」
十五日　山崎理恵子氏、平和合作画制作（本堂前）
平成三十年度平泉町成人式
（執事長　於武蔵坊）
十六日　第五十四回**平泉大文字送り火**
（雨のため延期。二十日に実施）
毛越寺浄土庭園法灯会
（貫首　於毛越寺）
十七日　第二回国宝中尊寺金色堂保存環境調査専門委員会
（執事長・管財章興・澄元　於東京文化財研究所）
十九日　玉川学園ハンドベル部・オーケストラ部奉納演奏
（本堂）
二十日　毛越寺施餓鬼会（金剛院）
二十一日　戸津説法（佐々木光澄師）聴聞（貫首　於大津市東南寺）

平泉町上下水道事業運営協議会（管財五大　於役場）
二十三日　施餓鬼会御逮夜（本堂）
二十四日　**大施餓鬼会・放生会**（本堂）
信濃国分寺様団参（貫首挨拶）
二十六日　蜂神社例大祭
（管財章興　於紫波町同神社）
二十七日　収蔵品調査（東京藝術大学松田誠一郎教授・管財・瑠璃光院）
三十一日　光勝院建設委員会
龍玉寺施餓鬼会（釈尊院）
釜石芸術文化協会様来山
（執事長挨拶）

◇九月

一　日　月次大般若（本堂）
二　日　泰衡公終焉の地大館錦神社・西木戸神社参拝（貫首、晋照）
三　日　**泰衡公御月忌**（金曼供　本堂）
八　日　五郎沼薬師神社秋季例大祭
（法務宏紹　於紫波町同神社）
十　日　仏教文化研究所研修東山二十五菩薩参拝と平泉ゆかりの古道探勝（一班　於一関市東山町）
十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）
十三日　研修二十五菩薩参拝と平泉ゆかりの古道探勝（二班）
十四日　荒了寛師天台功労賞授賞式並びに祝賀会（貫首　於大津市）
十五日　**国宝金色堂大修理の記録展**
（～十一月十八日、讃衡蔵）
十六日　第六十四回平泉町敬老会
（法務宏紹　於平泉中学校体育館）
十七日　藤原経清公命日祭
（総務澄円　於奥州市江刺）
白符忌（本堂）
十八日　福島教区観音寺矢島義謙大僧正弔問（貫首、随行宏紹）
十九日　赤堂稲荷例祭（護摩供）
二十日　北海道胆振東部地震物故者慰霊法要（本堂）
二十一日　金沢金箔伝統技術保存会様来山（執事長案内）
光勝院建設委員会
秋彼岸会法要（常行三昧　本堂）
二十三日　お経を読む会（地蔵院）
「平泉を鎮守の森にする」講演会（管財章興　於平泉文化遺産センター）
三十日　**金色堂大修理五十年慶讃「如意輪講式」法要**（本堂）
中尊寺通りホコ天まつり

◇十月

一　日　月次大般若（本堂）
二　日　慈眼会（本堂）
三　日　第二十六回平泉町社会福祉大会（執事長　於武蔵坊）
四　日　中尊寺菊まつり協賛会役員会（庫裡広間）
天台宗海外伝道事業団役員会（貫首　於上野両大師）
五　日　平泉古事の森事業
（管財章興　於奥州市）

金色堂調査（文化財建造物保存技術協会武藤正幸氏　管財）

六　日　釜石芸術文化協会様来山（執事長案内）

三陸郷土芸能奉演（東松島市大曲浜獅子舞）

八　日　京都官休庵翠心会様来山（執事長挨拶）

北上川リバーカルチャーアソシエーション理事会・総会・文化セミナー（貫首・執事長　於ベリーノホテル）

十　日　平泉町文化財調査委員会議（管財章興　於文化遺産センター）

十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）

十二日　岩手県建設業協会青年部様来山（貫首挨拶）

金色堂調査（室瀬和美氏・京都造形大学教授岡田文男氏・文化庁、管財）

十三日　山内大長寿院後住得度式（本堂）

十四日　月見坂車椅子体験会（主催平泉町社会福祉協議会）

三陸郷土芸能奉演（山田町八幡太神楽／塩竈市　塩竈神楽／大槌町　吉里吉里虎舞）

十九日　光勝院建設委員会

NHK盛岡放送局長大久保嘉二氏来山（貫首・執事長）

二十日　菊まつり開闢法要

お経を読む会（真珠院）

二十一日　一隅を照らす運動発足五十周年記念仙台大会（貫首　於仙台市）

二十二日　陸奥教区第三部檀信徒会様団参（総務晋照案内）

二十四日　京都大学教授井手亜里氏来山（執事長挨拶）

二十六日　**紅葉銀河**（参道の紅葉を照らす～十一月十一日）

一隅を照らす運動五十周年記念　第十一回天台宗岡山大会（貫首　於倉敷市民会館）

二十七日　被災者がつなぐ「震災追悼茶会」・琵琶奉納演奏（本堂）

第十三回義経・与一・弁慶・静・継信・忠信合同サミットin平泉（執事長　於平泉文化遺産センター）

二十八日　**秀衡公御月忌**（金曼供　本堂）

横手市子ども歌舞伎奉演（本堂）

三十一日　埼玉真言宗智山派第三教区様団参（利生院案内）

◇十一月

一　日　**秋の藤原まつり開幕**

藤原四代公追善法要

稚児行列

郷土芸能奉演（一関　行山流舞川鹿子躍）

二　日　菊供養会（本堂）

お経を読む会（貫首）

郷土芸能奉演（江刺　行山流角懸鹿躍／栗原　栗原神楽）

三　日　中尊寺能　半能「秀衡」

謡・仕舞（二葉きらり園、一関喜桜会奉納　能舞台）

伊藤園お茶振舞い（かんざん亭前）

郷土芸能奉演（胆沢　行山流都鳥鹿踊／平泉　達谷窟毘沙門神楽／衣川　川西念佛剣舞）

五　日　第三回国宝中尊寺金色堂保存環境調査専門委員会（執事長　於東京文化財研究所）

埼玉教区大蔵寺様団参（瑠璃光院案内）

八　日　平泉観光協会理事会（執事長）

九　日　写経奉納式（本堂）

十　日　葦名堰四百年記念事業記念式典（円乗院　於小山二ノ台）

十一日　東日本大震災物故者追善回向　月命日法要（本堂）

石巻市東雲寺青年会様団参（利生院挨拶）

秋期企画「経蔵法楽～声明の夕べ『諸天讃』～」（経蔵）

十二日　信濃国分寺寺庭・檀信徒様来山（円乗院案内）

陸奥教区第三部檀信徒会様団参（総務澄円挨拶）

十五日　菊まつり表彰式（本堂上段の間）

十六日　光勝院建設委員会

元在リトアニア日本国大使館特命全権大使重枝豊英氏来山（貫首挨拶）

十七日　喜多流能楽公演（貫首　於盛岡市民文化ホール）

十八日　山内円乗院副住職結婚式（本堂）

二十二日　光勝院建設委員会

二十三日　天台会御逮夜（本堂）

二十四日　**天台会**（御影供　本堂）

二十五日　天台宗ハワイ別院四十五周年記念法要（～二十九日、貫首於ハワイ別院）

二十六日　一関文化祭菊花展表彰式（管財五大　於一関文化センター）

三十日　平泉町上下水道事業運営協議会（管財五大　於役場）

御奉納者　御芳名

平成二十九年十二月～平成三十年十一月

一　光勝院地鎮祭　鎮め物

久慈市　久慈琥珀㈱　新田久男様

一　本堂用椅子　五十脚

一関市　㈱佐々木製菓様

一　法要用　円座　十五枚

平泉町　御所畳店様

一　書作品「源氏物語」　五十四帖

東京都　渡辺敏子様

浄財御奉納者　御芳名

平成二十九年十二月～平成三十年十一月

両磐酒造㈱様　五万円
海鋒　守様　十万円
菊池正仁様　三万円
㈲平泉観光写真社様　二十万円
立正佼成会花巻教会　教会長　林　成佳様　三万円
立正佼成会盛岡教会　教会長　馬場可隆様　三万円
信濃　国分寺様　三万円
信濃　国分寺団参加者一同様　三万円
海老原廣伸様　五万円
原　和子様　三万円
釜石市芸術文化協会　加東眞澄様　三万円
長江幸治様　三万円
菊池國雄様　三万円
真福寺様　五万円
東雲寺様　五万円
一関信用金庫　平泉支店様　三万円

（順不同）

赤堂稲荷鳥居建立寄進　御芳名

平成二十九年十二月～平成三十年十一月

平泉町　㈲銅盛鈑金工業様　一基

不動尊篤信御奉納者　御芳名

平成二十九年十二月～平成三十年十一月

一関市　川嶋印刷㈱様　十万円
多田孝文様　十万円
正法寺様　三万円
常住寺様　五万円
寶林寺様　三万円
渡辺敏子様　十万円
生命電視台　海濤法師信衆様　五万円
江戸高　十七期有志の会様　三万円
豊山長寿会様　三万円
金色の風栽培研究会様　十万円
茶道裏千家淡交会　岩手南支部様　十五万円
茶道裏千家淡交会　岩手南支部　宮澤啓祐様　三万円
東大寺様　三万円
㈱岩銀ディーシーカード　高澤勇登様　三万円
株式会社トラベルｅ旅・ｃｏｍ様　三万円
一関信用金庫　理事長　及川弘人様　三万円
立石寺様　三万円
㈲千葉恵製菓様　十万円
浄土宗　岩手教区教務所様　五万円
日比野様　五万円

中野区　中村武司様　十七万三千円
青森市　佐々木幸子様　十六万円
一関市　㈲豊隆軌道　千葉幸八様　七万五千円
和泉市　辻林正博様　七万円
秋田市　木村英夫様　五万二千円
金ケ崎町　㈱板宮建設　板宮一善様　五万円
奥州市　川端利郎様　五万円
大仙市　㈲ベル美容室　高橋紀美世様　五万円
豊橋市　渡邉良弘様　四万五千円
平泉町　北都高速運輸倉庫東北　小野寺芬様　四万円
富士見市　㈲ピーエスエス　塩沢潔様　三万五千円
一関市　㈱東北鉄興社様　三万円
一関市　㈱アーク様　三万円
平泉町　㈱フタバ平泉様　三万円
我孫子市　飯野健太郎様　三万円
銚子市　㈱イクオリティー　石毛裕之様　三万円
平泉町　一関信用金庫平泉支店様　三万円
仙台市　伊藤信子様　三万円
岡山市　浄土寺　枝川圓陽様　三万円

一関市　及川元一様　三万円
富谷市　小山　進様　三万円
栗原市　㈲金成工務店様　三万円
一関市　山平様　三万円
一関市　一八　渋谷正幸様　三万円
一関市　㈱精茶百年本舗様　三万円　衡年茶一二〇〇個
横浜市　瀬下　聡様　三万円
一関市　東北建工企業㈱　今野幸宏様　三万円
一関市　橋本友厚様　三万円
宮城県南三陸町　山口　昇様　三万円
盛岡市　山本　治様　三万円
青森県南部町　工銀青果　工藤一男様　季毎御供物
新潟市　松原晴樹様　季毎御供物
水戸市　つくし　藤枝恵枝子様　季毎御供物
黒石市　㈲池田不動産　池田陸奥男様　季毎御供物
弘前市　笹　隆治様・哲子様　季毎御供物
平川市　長尾智子様　季毎御供物
二戸市　㈲岩食商事　米沢　励様　季毎御供物
（順不同）

法華経一日頓写経会

六月九日（第二日曜日）午前十時より

六万九千余字よりなる法華経八巻に開経と結経を加えた一部十巻を一日の内に書写しあげる写経会。

奥州藤原氏二代基衡公が、亡父清衡公を追善供養するために修したという善業に倣い、平成九年より毎年開催しております。

詳細は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。

TEL〇一九一（四六）二二一一

ご祈祷・ご回向のご案内

□　当山祈祷道場不動堂にて祈祷勤修いたします。不動明王御宝前にてご祈祷後、お札とお供物をお授けします。志納金は一願五千円よりお申し込みいただけます。

例　厄除開運　家内安全　當病平癒　商売繁昌　良縁成就
交通安全　学業成就　身体健全　受験合格　心願成就　等

□　本堂ご本尊丈六釈迦如来御宝前におきまして先祖供養、水子供養、東日本大震災物故者供養を勤修いたします。ご供養の証として「追善殖福証」をお渡し（不要の方は当山にて奉納）いたします。志納金は一件三千円より。

例　〇〇家先祖代々供養　〇〇〇〇居士（大姉）供養
〇〇家水子供養　東日本大震災物故者供養　等

※ご来山申込みが難しい方は、ファックス等でもお申込みいただけます。
※ご不明の点は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。

TEL〇一九一（四六）二二一一
FAX〇一九一（四六）二二一六

ご祈祷札

殖福証

後　記

▽　金色堂「昭和の大修理」から半世紀。昨年四月三十日には記念シンポジウムを開催いたしました。浅見和彦先生からは、金色堂そして平泉を東北の全体の構図の中でどう考えていったらいいのかについてお話しいただきました。パネルディスカッションは四名の講師先生方が、それぞれの立場から金色堂にかかわる思いや所見、思い出を語っていらっしゃいます。講演録を収載しましたのでどうぞご覧ください。

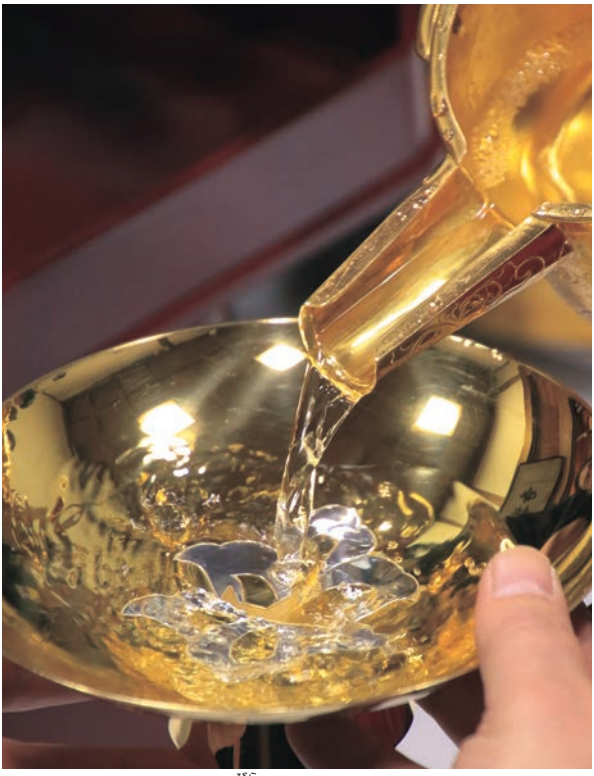
▽　旧暦元旦にこの後記を書いています。中国では旧正月（春節）の期間は連休（今年は四日～十日まで）で、七〇〇万人が海外旅行に出かけるとのこと。つい先日、花巻と上海の間に定期便が就航しました。数日後には中尊寺の境内も中国からのお客様で賑やかになるのかもしれません。

▽　ご寄稿いただいた皆様、写真提供にご協力いただいた各機関、お力添えいただいた方々に厚く御礼申し上げます。

（北嶺澄照）

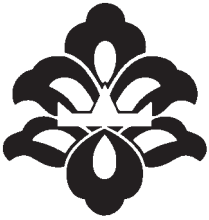
寺報『関山』は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。ぜひご利用下さい（http://www.chusonji.or.jp/）。

中尊寺〈寺報〉『関山』第二十四号
平成三十一年（二〇一九）二月十八日
発行　中　尊　寺
（執事長　菅原光聴）
〒〇二九―四一九五
岩手県平泉町字衣関二〇二
編集　中尊寺仏教文化研究所
印刷　川嶋印刷㈱



金盃披(ひら)き（1月8日）

中尊寺では元日から八日まで、天下泰平・万民豊楽(ばんみんぶらく)を祈願する修正会が勤修される。その結願を祝って、金盃披きが行われる。参加者は一年の幸福と五穀豊穣を祈り、清酒を飲み干す。



〈発行　中尊寺〉